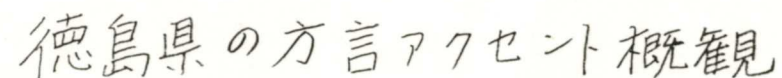


1989. 12. 3



32年後の動向

行政区画と方言区画 1.	各語類の考察 58.
徳島県のアクセント区画図 二音節名詞のアクセント体系 2.	まとめ 14a.
第2次アクセント調査地点 3.	分布図 1. ~ 4. 15. ~ 50.
二音節名詞の語類統合 4. 1989年調査	参考資料 148.
はじめに 5a.	

1989. 12. 3.

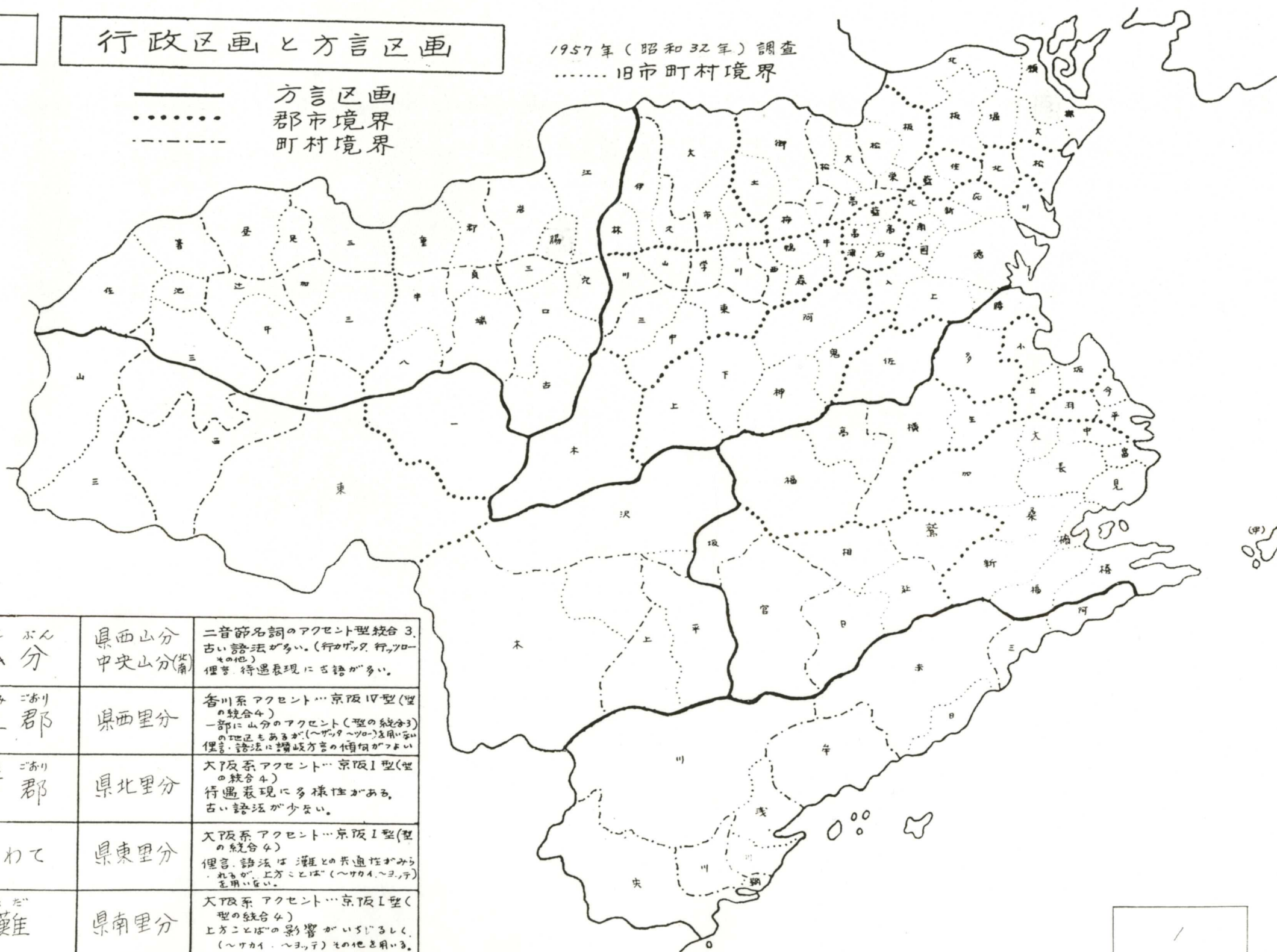
森 重 幸

行政区画と方言区画

1957年(昭和32年)調査
.....旧市町村境界

—— 方言区画
..... 郡市境界
- - - 町村境界

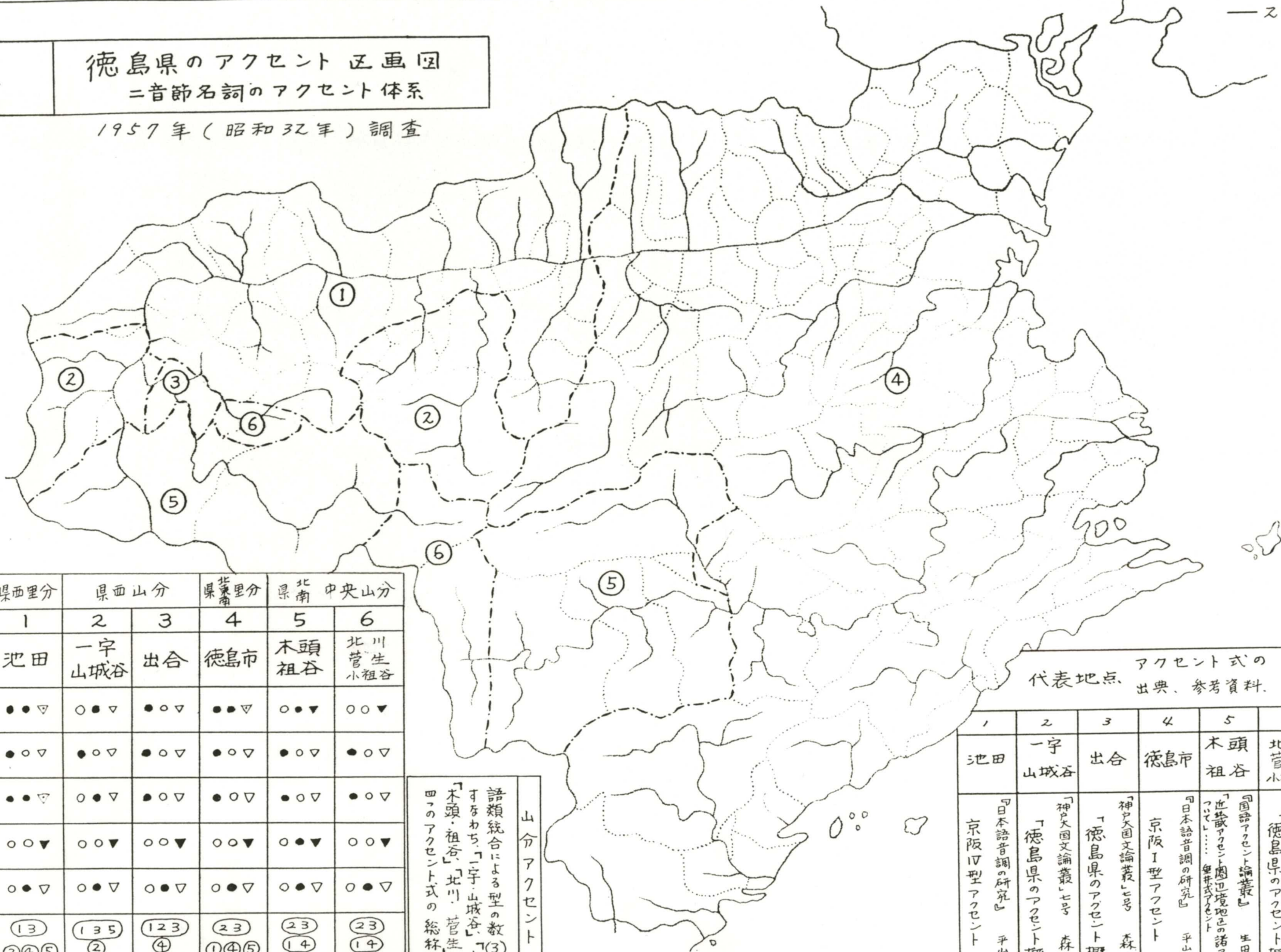
1	さん ぶん 山 分	県西山分 中央山分 <small>(北南)</small>	二音節名詞のアクセント型統合3. 古い語法が多い。(行カザッテ 行ッソー その他) 便宜・待遇表現に古語が多い。
2	かみ じあり 上 郡	県西里分	香川系アクセント…京阪IV型(型 の統合4) 一部に山分のアクセント(型の統合3) の地もあるが(〜ザッテ〜ツッテ)を用いない 便宜・語法に讃岐方言の傾向が多い。
3	しも じあり 下 郡	県北里分	大阪系アクセント…京阪I型(型 の統合4) 待遇表現に多様性がある。 古い語法が少なく。
4	うわて	県東里分	大阪系アクセント…京阪I型(型 の統合4) 便宜・語法は讃岐との共通性があり 「れちが」上方ことば(〜サカイ・〜ヨッテ) を用いない。
5	なだ 漢 隼	県南里分	大阪系アクセント…京阪I型(型 の統合4) 上方ことばの影響がいちじるしく (〜サカイ・〜ヨッテ)その他を用いる。



乙

徳島県のアクセント区分図
 ニ音節名詞のアクセント体系

1957年（昭和32年）調査



アクセント区分	県西里分	県西山分		県北里分	県北山分	中央山分
代表地点	1	2	3	4	5	6
論類	池田	一字山城谷	出合	徳島市	木頭祖谷	北川生小祖谷
第1類	●●▽	○●▽	●○▽	●●▽	○●▽	○○▽
第2類	●○▽	●○▽	●○▽	●○▽	●○▽	●○▽
第3類	●●▽	○●▽	●○▽	●○▽	●○▽	●○▽
第4類	○○▽	○○▽	○○▽	○○▽	○●▽	○○▽
第5類	○●▽	○●▽	○●▽	○●▽	○●▽	○●▽
統合関係	(13) (245)	(135) (24)	(123) (45)	(23) (145)	(23) (145)	(23) (145)
型の数	(4)	(3)	(3)	(4)	(3)	(3)

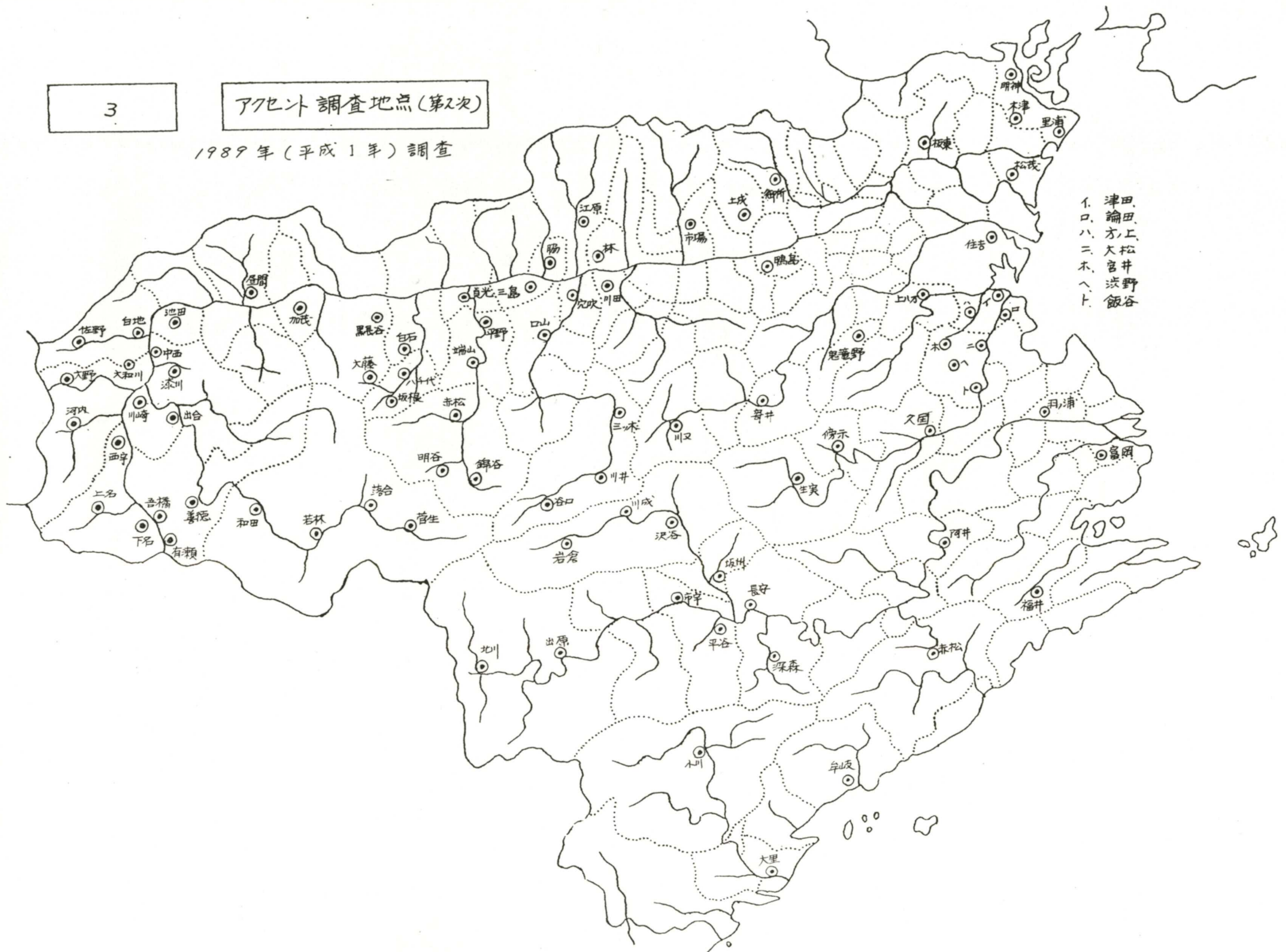
山分アクセント
 語類統合による型の数(3)のものを
 するわけに「一字山城谷」「出合」
 「木頭・祖谷」「北川・生小祖谷」など
 四つのアクセント式の総称とする。

アクセント式の 代表地点 出典、参考資料。					
1	2	3	4	5	6
池田	一字山城谷	出合	徳島市	木頭祖谷	北川生小祖谷
『日本語音調の研究』 平山輝男 京阪IV型アクセント	『神大国文論叢』七号 森重幸 『徳島県のアフレント概観』	『神大国文論叢』七号 森重幸 『徳島県のアフレント概観』	『神大国文論叢』七号 森重幸 『徳島県のアフレント概観』	『日本語音調の研究』 平山輝男 京阪I型アクセント	『神大国文論叢』七号 森重幸 『徳島県のアフレント概観』

3

アケボ調査地点(第2次)

1989年(平成1年)調査

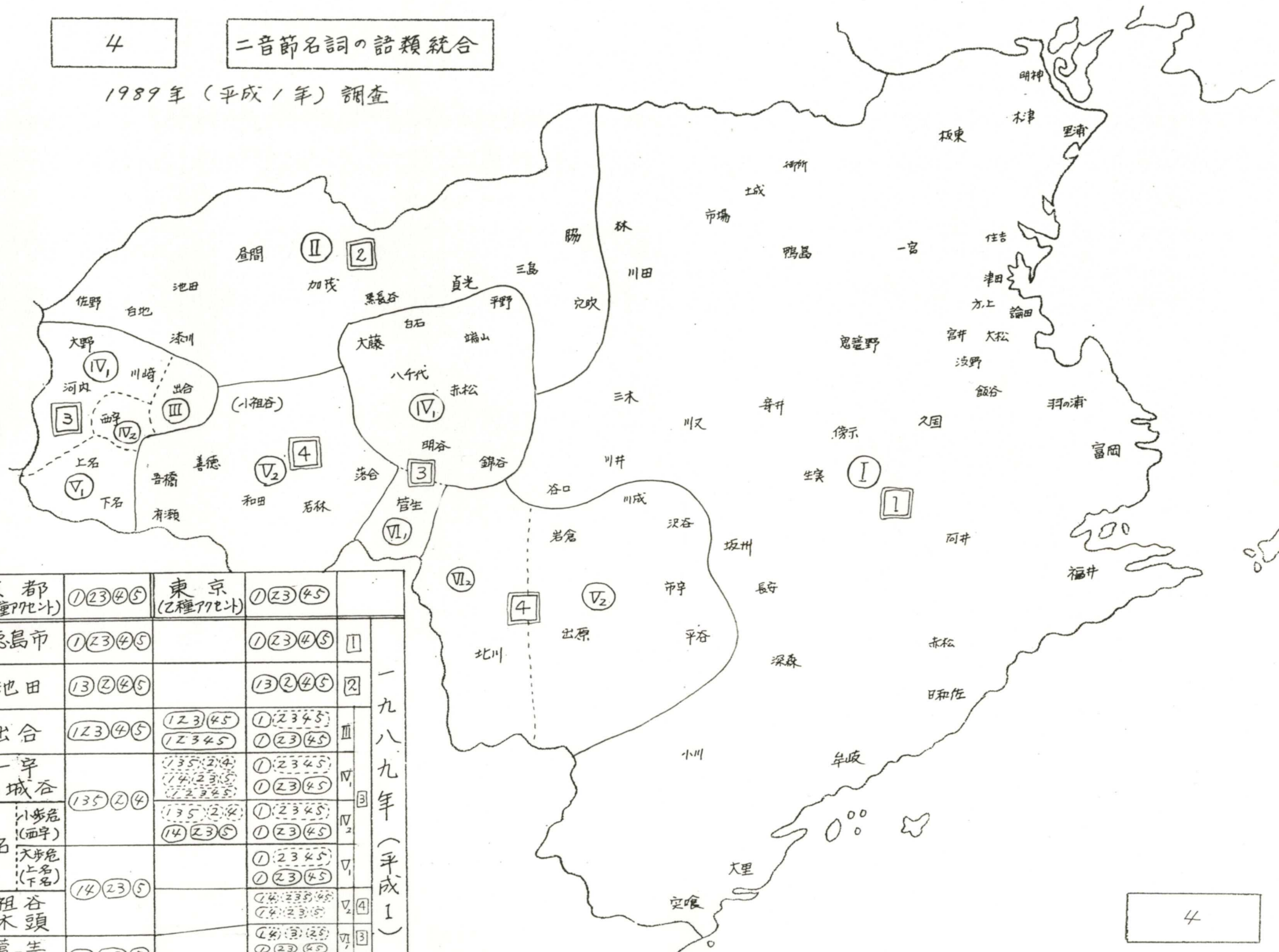


4

二音節名詞の語類統合

1989年(平成1年)調査

		京都 (甲種77地点)	①②③④⑤	東京 (乙種77地点)	①②③④⑤		
一九五七年(昭和32)	I	徳島市	①②③④⑤		①②③④⑤	I	一九八九年(平成1)
	II	池田	①③②④⑤		①③②④⑤	II	
	III	出合	①②③④⑤	①②③④⑤ ①②③④⑤	①②③④⑤ ①②③④⑤	III	
	IV	一宇山城谷		①③⑤②④ ①④②③⑤ ①②③④⑤	①②③④⑤ ①②③④⑤	IV	
		小歩危(西宇)	①③⑤②④	①③⑤②④ ①④②③⑤	①②③④⑤ ①②③④⑤	IV ₂	
	V	三名大歩危(上名)			①②③④⑤ ①②③④⑤	V ₁	
		三名大歩危(下名)	①④②③⑤		①④②③⑤ ①④②③⑤	V ₂	
	VI	祖谷木頭			①④②③⑤ ①④②③⑤	VI ₁	
		管生			①④②③⑤ ①④②③⑤	VI ₂	
		北川	①④②③⑤		①④②③⑤	VI ₃	



4

徳島県の方言アクセント概観

32年後の動向

森 重 幸

[I]	はじめに	5. a.
[II]	各語類の考察	5. b.
[III]	まとめ	14. a.
[IV]	分布図	1.~4. 15.~50.
[V]	参考資料	14. b.

[I] はじめに

徳島県方言アクセントの研究は、大正末期にまでさかのぼるが、初期の代表的な成果は、金沢治氏の「阿波言葉のアクセント」(昭9)である。金沢は、本県のアクセントを、①…祖谷型、②…美馬・三好型、③…その他型に三分類した。さらに、②を讃岐系、下流に分布する③を徳島系と判定し、その境界が吉野川中流の岩津と穂徳山であることを指摘した。すなわち、後学が、それぞれ、①→垂井式、②→高松式、③→京阪式と呼ぶアクセントに一致する偉業である。

その後、平山輝男、金田一春彦、生田早苗、山名邦男、その他各氏の研究により、本県方言アクセントの概略が把握された。本稿筆者も、先学の成果を学びながら全県調査し、「徳島県の方言アクセント概観」(昭33)で、③…出合式、④…一字・山城谷式などを報告して、本県の分布状況を明らかにした。

しかし、上記の研究以来、すでに、50余年、あるいは、30余年が経過している。

この間に第二次世界大戦があり、さらに、戦後の急激な社会変化があった。世代もまた、高年層の祖父から、中年層、壮年層の子、そして、若年層の孫へと三交代している。したがって、本県のアクセント研究は、往時の成果や資料を再検整理し、今後の動向と調査分析する時期となっている。

そこで、本稿筆者は、1989年度の阿波学会総合調査(板野郡土成町)を機に、方言アクセントの全県調査を試行することにした。調査は、土着の中学校1年生を中心として、小学校5・6年生から、高校2年生を対象とし、さらに、20歳前後の世代も補足した。調査方法は前回(昭和32年時)にならい、同じ地区で3名以上に協力してもらう。同時に、60歳前後の中高年層に御支援をお願いした。すなわち、現状を往時と比較するためである。また、前回の調査資料も再検し、補正して参考比較した。ちなみに、前回の調査(昭32)は、当時の中学校3年生(昭和17年の出生で、現在47歳)が主対象で、小学校6年生から高校3年生に及び、さらに、当時の中高年層に通時の御教示をいただいた。

なお、本稿では、一応、65歳以上を高年層とし、45歳以上を中年層、25歳までを若年層として論考している。

[II] 各語類の考察

(1) 一音節名詞

① 第1類 柄、蚊、子、皿、戸、実、身。

本県では、一音節名詞をスモラに発音するのが一般的であるが、県西地方(美馬・三好の2郡)では1モーラ発音も聞かれる。なお、本県の里分地方(二音節名詞アクセントの語類統合が<4>の地方)では、平板型がカー・カーガ・カガ(蚊)のように、上野善道氏の指摘する下降調となる。(…、○、▽、で示す) とくに、県西里分では、名詞・動詞の第1類に下降調平板型の傾向が強い。

a. 中年層 代表地点でしめすと、徳島市(●▽・●●▽)型で、池田、出合、一字、山城谷などは(●▽)型、さらに、祖谷・木頭などの中央山分地方で

は、(○▼・●▼・●●▼)型であった。

⚭ **若年層** ^{いげだ}池田 ~ ^{あきぶき}穴吹にいたる県西里分地方で(●▽)型と(●▽)型を両用する話者が目だつ。さらに、県西山分地方(出合、一字、山城谷など)で(●▽)型 → (●▼)型、さらに東京型(○▼)に変化中である。なお、里分地方は、各地で、話者により、また語彙によって、アクセントの揺れがあり、とくに、「柄が」がめだつ。中央山分地方では、東京型(○▼)が一般的である。

② 第2類 名、葉、日、藻、矢。

α **中年層** 全県的に、チガ(名)のように頭高型が一般的である。しかし、^{おえ}麻植郡や^{あま}美馬郡東部の吉野川中流地方で、モガ(藻)・ヤガ(矢)のような平板型が見られた。

⚭ **若年層** 前記の吉野川中流地方で、第2類のすべてを平板型(●▽・●●▽)に発音する者があり、吉野川下流地方や、その他の里分平地帯でも、「名が、藻が、矢が」などがめだつようになった。これに対して山分地方(二音節名詞アクセントの語類統合がく3の地方)では、第2類が、「名が・コノ名が・コノ名が」のように、尾高型、または東京型アクセントに変化中である。

③ 第3類 絵、尾、木、田、牛、根、火。

α **中年層** 全県的に、エガ・エーガ(絵)のように尾高型が一般的で、山分地方の一部に平板型が散見された。

⚭ **若年層** 里分平地帯の各地で、平板型や頭高型の話者が見られたが、まだ個人的な傾向と思われる。また、このような話者も、よく話し合ってみると、反省型としては尾高型が多く聞かれた。しかし、山分地方では、尾高型 → 東京型(●▽)の変化が確実に進行中で、とくに、県西山分でめだっている。

④ 一音節名詞の整理

α **中年層** 分布図で明らかなように、語類統合は、徳島市型…①②③、池田型…①②③、祖谷・木頭型…①③②となる。

⚭ **若年層** 吉野川流域の徳島市型地方、同じく池田型地方において、従来の頭高型アクセントを平板型に発音する話者がめだっている。両地方のアクセントを、●▽①②、○▼③に統合する方向であり、今後の動きに注目したい。

つぎに、出合、一字、山城谷などの県西山分地方では、語類統合はそのままながら、アクセントが、(●▽ ⇄ ○▼)のように逆転しはじめており、東京式に変化中である。また、祖谷(^{ひな}三名の^{かみ}上名・^{しも}下名も含む)、木頭(^{きだに}沢谷も含む)などの中央山分地方(^{きん}三好・^{きん}那賀、二郡の奥分)では、①③② → ①②③の再編統合で東京式に変化している。同次アクセント式の模倣より統合がそのまま安定するのか、さらに別局面におちつくのか、今後の動向に注目したい。

(2) 二音節名詞

① 第1類 飴、梅、枝、顔、風、酒、鼻、桃、牛、柿、口、首、鳥、水、道。

α **中年層** 代表地点でしめすと、徳島市と池田は(●○・●●▽)型、出合(●○▽)型、一字・山城谷は(○●▽)型、祖谷・木頭は(○●・●●▼・○●▼・○○▼)型である。

語彙的な変異を見ると、祖谷・三名をのぞく県西地方(^{あま}美馬・^{きん}三好の二郡)でアメ・アメガ・アメガ(飴)となる。

なお、出合型(●○▽)地方の高年層には、第1類のすべてを頭高型ではなく、平板型(●●▽)とする話者が少数ながら共存する。また、一字・山城谷型(○●▽)地方の高年層も、第1類を中高型だけでなく、(●●▽・●●▽)とすることがある。しかし、中年層は、コノミチが・コノミチが(道)のように発音するのが一般的である。

⚭ **若年層** 徳島市や池田などの里分地方は変化が見られない。これに対して、出合型地方では従来の(●○▽)型がほとんど消滅して、(○●○)型、さらに東京型(○●▼)に変化中である。つぎに、一字・山城谷型の地方も、地域的な差はあるものの、漸次(○●▽) → 東京型(○●▼)に変化している。

一方、祖谷・木頭などの中央山分は、東京型(○●▼)に統一した。以上をまとめると、本県山分地方(県西山分、および中央山分)では、第1類のアクセントがすべて東京型に統合したか、もしくは統合中である。

② 第2類

歌、音、川、下、寺、人、村、石、
紙、垣、夏、橋、雪、冬、町。

α 中年層 全県的に頭高型(●○▽)が一般的であるが、出合地方の高年層に、第2類のすべてを平板型(●●▽)とする話者が少数共存しているのが注目される。語彙的な変異として、県西地方で、カキガ(垣)となり、また、一字、端山などで、テラガ(寺)・ヒトガ(人)・カキガ(垣)となる。

β 若年層 出合、一字、山城谷などの県西山分、および、三名、祖谷(菅生)などの県北中央山分で、(●○▽)型から(●●▽)型、または東京型アクセントの(○●▽)型に変化中である。一方、県西里分地方では、「垣・下・寺・人・村」などが平板型となり、さらに、「石・紙・雪・町」をも平板型とする話者が出現して、語彙的な変異の拡大が注目される。

③ 第3類

泡、池、色、腕、馬、皮、草、雲、倉、事、
島、玉、花、腹、山、足、犬、鬼、貝、神、
靴、髪、栗、炭、鯛、月、羊、彼、蚤、耳。

α 中年層 県西地方をのぞいて、ほとんどが頭高型(●○▽)である。県西里分地方、すなわち、脇〜池田にいたる吉野川流域は、主として平板型(●○・●●▽)であるが、語彙によっては、下流の頭高型が混在し、分布状況が異なっている。つぎに県西山分、すなわち、一字、山城谷の二地方では中高型(○●○▽)が一般的であるが、高年層には、(●●○▽・●●●▽)をも共用する話者がいる。また、出合地方は頭高型が一般的であるが、高年層に、第3類を平板型(●●●▽)とする話者が少数共存するのが注目される。

上記の県西里分と県西山分のいずれにおいても、「神・事・彼・花」は頭高型

で、「皮」は尾高型となる共通点が注目される。一方、県南の海部郡では、三岐と阿部をのぞく各地で、イケガ(池)となる。

β 若年層 県西地方で、フモカ(雲)が一般化し、吉野川下流の県東部に拡大の兆がある。また、県南地方では、イケガ(池)の分布域が拡大して阿南市の一部におよんでいる。つぎに徳島市型(●○▽)と池田型(●●▽)の競合関係を、県西里分地方の中高年層と若年層について調査中であるが、十分な結論を得ていない。しかし、吉野川中流の境界地帯(岩津と種穂山の周辺地区)において、池田型地方の江原に、第3類を徳島市型とする話者が1名あり、また一方、徳島市型地方の林、川田に、全語彙を池田型とする話者が2名いた点に注目したい。というのは、第2類における(●○▽)→(●●▽)の変化が県西地方から拡大しつつある状況とも関連して、第3類における競合が表面化しはじめたと見られるからである。第3類の変化は、県西山分の出合、県北中央山分の祖谷(菅生)、三名(上名・下名)などでもっとも顕著である。すなわち、(●○▽)→(○●▽)という東京型アクセントの派生である。なお、一字、山城谷など、県西山分の中学・高校生には、第3類を(●●●・●●●▽)と内省する者もあり、フモカ・ゴフモカ(雲)と発音する点が注目される。

④ 第4類

栗、糸、縮、笠、肩、今日、下駄、
空、舟、海、帯、父、箸、松。

α 中年層 徳島市、池田などの里分地方、および、出合、一字、山城谷などの県西山分地方で、尾高型(○●・○○▼)となる。これに対して、祖谷、木頭などの中央山分では、(○●・●●▼・○●▼、または○○▼)型である。語彙の変異を見ると、県西里分、県西山分などで「ウミガ(海)」となるほか、一字、端山などの県西山分で、「空・父・肩・笠」などが頭高型になる傾向がある。

β 若年層 一字、山城谷などの県西山分で中高型(○●○▽)が出現し、さらに頭高型(●○▽)へと変化中である。また、祖谷、木頭などの中央山分では、(○●・○●▼)型に統一したが、さらに、三名(上名・下名)、祖谷(菅生)

から頭高型(●○▽)となり、本県山分地方で東京型アクセントが派生している。

つぎに語彙的な変異をみると、ウミガ(海)の地方は、おおむね ウミガ になった。そして、あらたに、クケガ(父)が全県に一般化し、クケガ(乳)と区別されている。このほか、^{さまち}佐馬地、^{かも}加茂、^{あまぶき}穴吹、^{かわた}川田、^{とみおか}徳島市、^{とみおか}島岡などの里分各地に第4類のすべてを中高型とする話者があり、今後の動向を注目していきたい。

5 第5類

雨、井戸、桶、蔭、声、蜘蛛、琴、
鮎、窓、蛇、秋、鮎、黍、鯉、猿。

α 中年層 全県的に、アメー・アメガ(雨)のように中高型が一般的である。語彙的な変異として、「琴」は、海部郡下灘地方をのぞき頭高型(●○▽)となる。さらに、祖谷、木頭などの中央山分地方では、「声・蜘蛛・窓」なども頭高型である。また、「黍」は、全県的に尾高型(○●・○○▽)が多く、さらに、県西地方では、「蛇」も尾高型が多い。

β 若年層 里分地方では高年層と同様に中高型(○●・○○▽)が一般的である。しかし、頭高型は、コト(琴)に加えて、オケ(桶)が一般化し、さらには、アキ(秋)・キビ(黍)・クモ(蜘蛛)なども各地に散見された。

山分地方では、昭和40年代後半の出生者から頭高型アクセント化の傾向が決定的となっている。とくに、出合、一字、山城谷などの県西山分や、三名(上名・下名)、祖谷(菅生)などの県北中央山分地方において、第5類のすべてを東京型(●○▽)とする話者が出現している。

なお、一字、山城谷など、県西山分地方の中学・高校の世代には、第5類を(●●・●●▽)と内省する者があり、クモガ・コノクモガ(蜘蛛)と発音する点が目される。

6 二音節名詞の整理

α 中年層 すでに、「徳島県のアクセント概観」でまとめたように、本県には、6アクセント式があるが、本稿筆者が報告した「出合式」と「一字・山城

谷式」の成立について考察すると、つぎのようである。

(1) 出合式「●○▽ / 1・2・3」(4) (5) は、隣接の池田式「●●▽ / 1・3」(●○▽ 2) (4) (5) から、主として変化した。すなわち、池田式の第1・3類平板型が、第2類頭高型に統合した型式である。その傍証として、出合地方の高年層に、頭高型の第2類が、平板型第1・3類に統合した、いわば、逆出合式アクセント「●●▽ / 1・2・3」(4) (5) が少数ながら共存している。

なお、出合地方のうち、^{せんぞく}千足部落と^{やまがい}山貝部落は従来一字・山城谷式の地已で、前者は1908年(明治41)、後者は1921年(大正11)の出生者から出合地方の校区に通学しはじめた。その後、千足部落は1942年(昭和17)、山貝部落は1960年(昭和35)の出生者から出合式アクセントとなった。校区変更以来34~39年後の変化であるが、校区変更とアクセント式変化との関係については、さらに後考したい。

(2) 一字・山城谷式「○●▽ / 1・3・5」(2) (4) は、隣接の池田式から変化した。すなわち、池田式の平板型第1・3類が、第5類中高型に統合した型式である。というのは、当地方の高年層に、第1・3類を(●●▽、●●▽、○●▽)のいずれにも発音する話者がいるからである。ただし、中年層は(○●▽)が一般的で、第3類(雲)と第5類(蜘蛛)を、いずれも、「クモガ・コノクモガ」のように同じアクセントに発音している。

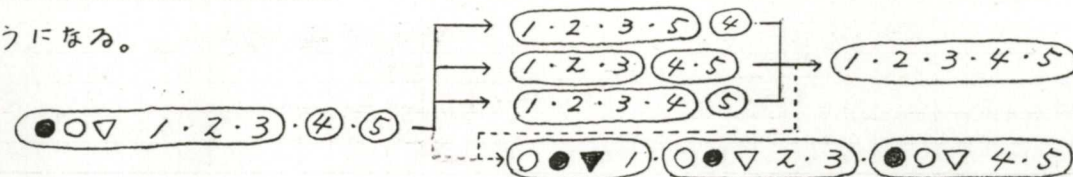
なお、「出合式」と「一字・山城谷式」などが、「池田式」と関連があることの傍証として、これらの地方で、いずれも、第1類 アメガ(飴)、第3類 カミガ(神)、コトガ(事)、ナミガ(波)、ハナガ(花)、カワガ(皮)、第4類 ウミガ(海)のように、アクセントの語彙的な変異が共通することも注目したい。

β 若年層 これまで、各語類のアクセントについて中年層と若年層を比較してきたが、それぞれ顕著な変化があった。そこで、これを語類の統合関係からまとめてみると、つぎのようになる。

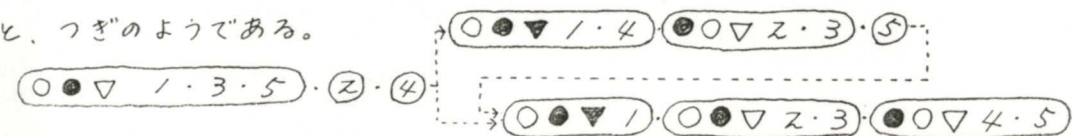
(1) 徳島市式「●○▽ 2・3」(1) (4) (5)、および、池田式「●●▽

「1・3・②・④・⑤」の地方。… いずれも本県の里分地方で、語類統合は<4>である。上記、両地方の現状をまとめると、若年層に見られたアクセントの変化は、語彙的な変異にとどまるか、あるいは個人的な傾向の範囲にとどまっており、地域的な語類アクセントの変動という質的变化には及んでいない。

(2) 出合式の地方。— 1960年(昭35)頃の出生者からアクセントに変動の兆候があらわれた。そして、1965年(昭40)出生の1名を最後に完全な出合式アクセントは出現せず、語類統合<2>の話者、さらには全語類頭高型の話者が出現したが、大勢としては、方言アクセントに地域的な個性の見られない混沌流動の状態がつづいた。その後、1973年(昭48)の出生者から、突然に東京式アクセントの話者が出現しはじめた。この変化過程を語類の統合関係から示すと、つぎのようになる。



(3) 一字・山城谷式の地方。… 語類統合は<3>で、いずれも、県西山分の二地方である。地域的に遅延はあったが、1960年(昭35)頃の出生者から、アクセント変動の兆候が見えはじめた。とくに、山城町西字地区(通稱 小歩危)では、1967年(昭42)出生者から垂井式アクセントの話者が出現し、ついで、1975年(昭50)以後の出生者に東京式アクセントの話者が出現している。その他の地方にも垂井式アクセントの話者が散見されたが、大勢は混沌流動の状態を経過し、漸次、東京式アクセントを派生しはじめている。この変化過程をしめすと、つぎのようである。



なお、当地方の中学・高校の世代で、一字・山城谷式アクセント、あるいは、これに類似するアクセントの話者の中には、第1・3・5類を(○●▽)型ではなく、(●●▽)型と内省する人がかなり多い。たとえば、第3類(雲)、および、第5類(蜘蛛)を、いずれも、「フモガ・コノ フモガ」と発音する傾向

である。

(4) 祖谷・木頭式の地方。… いわゆる垂井式アクセントの地方である。このうち、三好郡山城町三名地区(旧、三名村上名、および下名)では、1970年(昭45)頃の出生者からアクセントに変化の兆候があらわれ、1973年(昭48)の出生者から東京式アクセントが出現しはじめた。また、三好郡東祖谷山村の菅生地区では、1973年の出生者に変化の兆候が見え、1976年(昭51)の出生者に東京式アクセントが出現している。すなわち、○●▽ 1・④・●○▽ 2・3・⑤ → ○●▽ 1・○●▽ 2・3・●○▽ ④・⑤ の変化である。

その他の祖谷地方では、1970年頃の出生者から、「第1類は安定で、第2・3・4・5類が流動的」というパターンを漸次つよくしており、現在も混沌の中にある。

祖谷・三名などの県北中央山分地方とは対照的に、木頭・沢谷などの県南中央山分地方のアクセントは、現在のところ、比較的安定した状態である。しかし、当地方でも、第4・5類が不安定になる傾向を示しているので、いずれは祖谷地方の状況へと進展するのではなかろうか。

以上をまとめると、本県の里分地方に分布する徳島市式、池田式など、いずれも語類統合<4>のアクセント式は比較的安定した状態である。これに対して、山分地方に分布する、出合式、一字・山城谷式、祖谷・木頭式など、いずれも語類統合<3>の山分アクセントは、第1類が従来の統合から離脱し、第2～5類も再編し、語類統合<3>の東京式アクセントの方向に再編統合しはじめている。

とくに注目したいのは、これらが同次のアクセント式であることから、当然ながら統合語類の分離と再編という、積すべり統合をしている点である。徳島県の山分アクセント—出合式、一字・山城谷式、祖谷・木頭式(垂井式)—が東京式アクセントにまとまるのか、あるいは、ひきつづき流動して、さらに別の局面におちつくのか、今後の動向に注目したい。また、このような変化が本県だけのものかどうか、近畿周辺方言アクセントの動向もあわせて後考を期している。

(3) 三音節名詞

三音節名詞は、下記の61語について調査した。しかし、各語類のアクセントが、二音節名詞のように個性的ではない。そこで、前回の調査資料(昭32)を補正して中年層の実態を表示し、その後の変化を略記したい。

① 第1類	筏、柳、鰯、飾、霞、形、着物、煙、仔牛、都、氷、魚、机、鼻血、羊。
② 第2類	間、小豆、毛拔、釣瓶、蜥蜴、ニッ、二人。
③ 第3類	黄金、小麦、力、二十才、岬。
④ 第4類	頭、恨、男、思、表、女、言葉、刀、宝、鉄、東、光、袋、仏、鏡。
⑤ 第5類	朝日、命、胡瓜、心、姿、痰。
⑥ 第6類	鬼、鰻、鳥、狐、高木、鼠、雀、背中。
⑦ 第7類	苺、後、蚕、鯨、葉、病、児。

a 中年層

代表 地点 アクセント	A	B	C	D	E	F
	池田	出合	一字 山城谷	徳島市	祖谷 木頭	菅生 北川
●●●○	(1) 4	(1)		1	(1) (6)	
●●●○				4	4	4
○●●○	(2) 7	(1) (2) 7	(1) (2) 4 7	(2) 7	(2) 7	(2) 7
●○○○	(3) 5	(3) 4 5	(3) 5	(3) 5	(3) 5	(3) 5
○○●● ○●●●	(1) 6	(1) 6	(1) 6	6	(1) (6)	1 6

b 若年層 概観すると、池田式や徳島市式が分布する里分地方では、語類

統合にかかわるような質的变化は見られない。これとは対照的に、出合式、一字・山城谷式、祖谷・木頭式など、いわゆる山分アクセントの分布する山分地方では、各語類が東京型アクセントへの変化をたどっている。

すなわち、第1類と第6類は、木頭地方(県南中央山分)をのぞく山分各地方で(○●●▼)型に統一し、また、第4類は(○●●▽)型に変化しはじめた。

つぎに、語彙的な変異をみると、第6類…カラス(鳥)、第7類…ヤマイ(病)・カイコ(蚕)などが全県下におよびつつある。さらに、県西山分地方では、第2類…フダツガ(ニッ)・フタリガ(二人)を筆頭にして、その他も漸次東京型アクセントに変化しはじめている。

(4) 二音節動詞

① 第1類	売る、置く、買う、聞く、咲く、泣く、巻く、焼く、言う、行く、割る、着る、寝る。
-------	---

a 中年層

徳島市・池田	里分	●○	→ 下降調の終止形アクセントは「サグ(咲)」で、連体形は「サクトキ(時)」のようになる。その他の二音節語下降調三音節語下降調も同様。
一字・山城谷	県西山分	●○	
祖谷・木頭	中央山分	○●	

b 若年層 一字、山城谷、出合などの県西山分地方で、(●○)型 → (○●)型に変化し、東京型アクセントが拡大している。里分地方は安定している。

② 第2類	合う、打つ、書く、切る、食う、立つ、飲む、吹く、降る、読む、来る、出る、見る。
-------	---

a 中年層

全県的に尾高型(○●)であるが、平谷、上木頭、出合、古宮などで、尾高型と平板型(●○)を両用する話者が目立つ程度であった。

b 若年層

出合、一字、山城谷などの県西山分地方、および、祖谷、三名などの県北中央山分地方で、(○●)型 → (●○)型に変化しはじめており、東京型アクセントが出現した。

③ 第3類	居る(オルイル)
-------	----------

α **中年層** 池田～脇にいたる県西里分地方では、平板型(●○)となるが、その他の地方は頭高型(●○)である。

β **若年層** 出合、一字、山城谷などの県西山分地、および、祖谷、三名などの県北中央山分地方で、(●○)→(○●)と変化しはじめており、東京型アクセントが出現しつつある。

④ 二音節動詞の整理

	池田	徳島市	出合・一字・山城谷		木頭・祖谷	
			中年層	若年層	中年層	若年層
第1類	●○	●○	●○	●○→○●	○●	○●
第2類	○●	○●	○● 出合(●○)	○●→○●	○● 木頭(●○) 祖谷(●○)	○●→○●
第3類	●○	●○	●○	●○→○●	●○	●○→○●
語類統合	①③②	①②③	①③②→①③②	①③②	①②③ 木頭②③ 祖谷①③②	①③②

上記のうち、池田、徳島市、木頭の各地方は若年層のアクセントが比較的安定している。これに対して、県西山分、および県北中央山分では、統合語類の変化、および再編統合により東京式アクセントが出現している。

(5) 三音節動詞

- ① 第1類 (A) 上る、遊ぶ、登る、拾う、運ぶ、進む、殺す、変る、語る、洗う、通う、渡る、当る、歌う、違ふ。
- (B) 上げる、植える、借りる、消える、捨てる、負ける、染める、曲げる、焼ける、割れる、開ける。

α **中年層** 徳島市、池田などの里分地方では、主として平板型(●●○)、県西山分の出合、^{はばやま}端山などで頭高型(●○○)、同じく県西山分の一宇、山城谷などで中高型(○●○)となる。また、祖谷、木頭などの中央山分地方は、(●●○・●●●)型、または(○●●)型である。

語彙的な変異を見ると、「遊ぶ・曲げる」は県内全域でおおむね尾高型、「上

る、登る、拾う」も吉野川水系地方(下流部をのぞく)で尾高型となる。一方、県東部と県南部の各地で、「通う・曲げる」が頭高型となっている。

β **若年層** 里分地方では、吉野川下流地方に尾高型「登る」が拡大した程度で見るべき変化はない。これと対照的に、山分地方の各地は、遅速の差はあるが、漸次、東京型(○●●)に変化中である。

- ② 第2類 (A) 余る、痛む、祈る、動く、移る、恨む、起こす、思う、光る、守る、作る、曇る、照らす、通る、習う。

α **中年層** ^{いしば}市場・^{かじま}鴨島より以西の吉野川中流域、および、これに連接する上流地方の県西里分では平板型(●●○)、県西山分のうち、一宇、山城谷などでは(●●○)型ないし(○●○)型、そして出合地方は(●○○)型である。その他の地方は、おしなべて頭高型(●○○)となっている。

語彙的な変異を見ると、イノル(祈)・マモル(守)の分布は広域で、吉野川下流部から南下して那賀川以北に及んでいる。また、端山、八千代などの県西山分ではナラウ(習)が一般的である。

β **若年層** 県西地方に分布していた平板型(●●○)が、県東部、および県南部に拡大した。しかし、県東部、および県南部の若年層は、従来の頭高型アクセントにも違和感がないという共通の感想を持っている。一方、県西山分地方では、一宇、山城谷などで(●●○)型→(○●○)型に変化し、出合では、(●○○)型→(○●○)型に変化するなど、東京型アクセントが出現している。しかも、このような形勢が、県北中央山分の三名、祖谷(菅生)などにも及んでいるのが注目される。これに対して県南中央山分の木頭地方では、頭高型から、平板型(●●○)や尾高型(○○●)に変化した話者もあるが、概して安定した状況である。語彙的な変異として、池田～徳島市～富岡にいたる里分周辺地帯で、ツクル(作)が定着しており、さらに、県内各地に、テラス(照)も散見されている。

- ③ 第2類 (B) 生きる、起きる、落ちる、延びる、過ぎる、

建てる、付ける、溶ける、投げる、逃げる、
覚める、晴れる、見える、分ける。

2 中年層 市場・鴨島より以西の吉野川中流域、および、これに連接する上流地方の県西里分では、京阪アクセントの現代型(〇〇●)である。これに対して、県東部、および県南部の里分平地帯では頭高型(●〇〇)と尾高型(〇〇●)が両用されている。すなわち、過渡期の様相で、都市部を中心に現代型化がすすんでいる。高年層で古型の頭高型が安定しているのは、祖谷、木頭などの中央山分地方だけである。他方、出合、一字、山城谷などの県西山分地方は、中高型(〇●〇)の東京アクセントである。

3 若年層 里分地方では、すでに京阪アクセントの現代型(〇〇●)が一般化した。しかし、県東部、および県南部の若年層は、従来の頭高型アクセントにも違和感がないという共通の感想を持っている。祖谷、木頭などの中央山分でも(●〇〇)型→(〇〇●)型に変化中である。しかも、県北中央山分の三名や祖谷(菅生)では、尾高型から、さらに東京型(〇●〇)に移行しはじめており、祖谷地方に広く波及する形勢である。

4 第3類 歩く、隠す、入る、参る。

2 中年層 徳島市、池田などの里分地方では、おおもね尾高型(〇〇●)である。ただし、県西山分地方に隣接する、佐馬地、三縄(添川)、貞光などで中高型(〇●〇)となる。県西山分の一字、山城谷では中高型(東京型)が一般的であるが、出合では、(●●●)型または(〇●●)型となる。祖谷、木頭などの中央山分でも、主として(〇●●)型であるが、小祖谷、菅生、北川などの一部地では尾高型(〇〇●)となっている。

3 若年層 一字、山城谷など、県西山分地方の東京型(〇●〇)が、同地方の出合に拡大し、さらに、これに隣接する県北中央山分の祖谷、三名などの地方、および県西里分の三左、加茂などに出現している。これに対して、県南中央山分の木頭地方では、(●●〇)型または(●●●)型から(〇〇●)型に変化

し、さらに、若年層には頭高型(●〇〇)の話者もかなり多い。

5 三音節動詞の整理

	池田	徳島市	出合、端山、一字、山城谷		木頭 祖谷	
			中年層	若年層	中年層	若年層
第1類 A _B	●●〇	●●〇	出合 { 〇●〇 } 端山 { 〇●〇 } 一字 { 〇●〇 } 山城谷 { 〇●〇 }	〇●●	●●●	〇●●
第2類 A	●●〇	●〇〇→ ●●〇	出合 { 〇●〇 } 端山 { 〇●〇 } 一字 { 〇●〇 } 山城谷 { 〇●〇 }	〇●〇	●〇〇	木頭 ●〇〇 祖谷 〇●〇
第2類 B	〇〇●	●〇〇→ 〇〇●	〇●〇	〇●〇	●〇〇	木頭 〇〇● 祖谷 〇〇●
第3類	〇〇● 出合 { 〇〇● }	〇〇●	出合 { 〇●〇 } 端山 { 〇●〇 } 一字 { 〇●〇 } 山城谷 { 〇●〇 }	〇●〇	●●● 〇〇●	木頭 { 〇〇● } 祖谷 { 〇〇● }
語類統合	1AB 2A (2B 3)	1AB 2AB 3 → 1AB 2A (2B 3)	一字、山城谷 2(A) 1AB 2B 3 端山 1AB 2(A) 2B 3 出合 1AB 2A 2B 3 → 1AB 2AB 3	1AB 2AB 3 → 1AB 2A 2B 3	1AB 2AB 3 → 1AB 2A 2B 3	木頭 1AB 2A 2B 3 祖谷 1AB 2AB 3

上表をまとめると、本県里分では県西地方を主とする池田型が安定している。これに対して徳島市型は語類統合が(2)となって池田型と同じアクセントになった。また、県西山分では、各地方それぞれが東京式アクセントになり、その形勢は県北中央山分の祖谷、三名地方にも波及している。

(6) 二音節形容詞

1 第1類 無い、良い。

2 中年層 全県的に(〇●)型である。しかし、一字、山城谷などの県西山分地方には(●〇)型の話者が若干あり、とくに、山城谷では、ヨイ(良)がめだっている。なお、方言としては、「良い」は用いないで「エエ」である。

3 若年層 里分地方は、従来の(〇●)型である。これに対して、出合、一字、山城谷などの県西山分地方、および、祖谷(菅生)、三名などの県北中央山分地方では、(〇●)型→東京型(●〇)に変化中である。

2 第2類 酸い、濃い。

2 中年層 日常会話の時は、スイイ(酸)・コオイ(濃)であるが、音読の時は、「スイ・コイ」となる。

Ⓒ **若年層** 日常会話の時は、「スイイ・コオイ」が一般的であるが、出合・一宇・山城谷などの県西山分地方、および、祖谷・三名などの県北中央山分では、「スイイ・コオイ」になりやすい。また、勝浦川以南の県南地方では、「コオイ」が比較的多用されている。ただし、音読の時は、いずれも、「スイ・コイ」である。

(7) 三音節形容詞

① **第1類** 赤い、浅い、甘い、荒い、重い、軽い、丸い、厚い、薄い、遅い、堅い、遠い。

Ⓐ **中年層** 池田～徳島市にいたる吉野川流域地方は(●○○)型である。しかし、鳴門市周辺の犬津・堀江など、いわゆる下板地方の高年層には古型(●●○)型がある。これに呼応するように、勝浦川以南の県南地方では、古型の(●●○)型が一般的で、小松島、富岡などの都市部より、現代型(●○○)に変化している。語彙的な変異を見ると、一宇、山城谷などの県西山分地方その他で中高型や尾高型が散見されるものの、個人的な傾向にとどまっている。

Ⓑ **若年層** 吉野川流域地方は現代型(●○○)が安定しているが、鳴門市周辺部では、古型のトオイ(遠)が一般的であった。つぎに、勝浦川下流部を南部中学校1年生で見ると(●●○)型→(●○○)型の変化はいちじるしく、古型(●●○)に違和感を持たない者は、12名中で1名に過ぎなかった。さらに県南各地をみると、木頭、沢谷などの県南中央山分地方では古型(●●○)が安定しているが、小松島、富岡などの都市部では現代型(●○○)が一般化した。

しかし、その他の地区では、話者によって、全語彙を(●●○)型、あるいは(●○○)型とする者があるばかりでなく、新・旧のアクセントを混用、または並用する者もあって、地域的な傾向を判断しがたい。

なお、とくに注目されるのは、出合、一宇、山城谷などの県西山分地方で東京型(○●●)が出現しはじめたこと、祖谷(菅生)、三名などの県北中央山分で中高型(○●○)に変化しはじめたことである。

② 第2類

青い、暑い、清い、黒い、白い、狭い、高い、近い、強い、長い、早い、安い、古い、細い。

Ⓐ **中年層** 池田～徳島市にいたる吉野川流域地方は頭高型(●○○)である。しかし、勝浦川以南の県南地方では、アオイ(青)、キヨイ(清)が多用されるほか、「黒い・狭い・高い・強い」なども(●●○)となりやすい。

一方、県西山分地方は、一宇、山城谷などが東京型(○●○)で、このほか、八千代は(○●●)型が多い。

Ⓑ **若年層** 吉野川流域地方は頭高型が安定している。一方、県南地方は、勝浦川下流域や都市部で頭高型(●○○)が一般化した。しかし、その他の各地では、中高年層と同じアクセントの話者もあれば、第2類を(●○○)型とする話者、あるいは(●●○)型とする話者があり、地域的な特性をはかりがたい。他方、県西山分の出合、八千代、および、県北中央山分の祖谷(菅生)、三名などでは、(●○○)型→(○●○)型に変化し、東京型アクセントが拡大している。

③ 三音節形容詞の整理

	徳島市 池田	山城谷 八千代 菅生 三名		富岡(横瀬) 木頭	
		中年層	若年層	中年層	若年層
第1類	イ●○○	イ●○○	イ●○○ イロハ●●●	ニ●●○ イ●○○	ニ●●○ イ●○○
第2類	イ●○○	山城谷 八千代 菅生 三名 ○●○ ○●○ ●○○ ●○○	○●○ ハ●●● イ●○○	イ●○○ ニ●●○	富岡 (横瀬) 木頭 ○●○ ●●○ ●○○ ●○○
語類統合	(11 21)	山城谷 (11 20)→(11 20) 八千代 (11 20)→(11 20) 菅生 三名 (11 21)→(10 20)		富岡 (11 21)→(11 21) (横瀬) (11 21)→(11 21) 木頭 (11 21)	

上表を一覧すると、池田～徳島市にいたる吉野川流域は頭高型に統合して安定している。県南地方は、富岡、小松島などの都市部で(●○○)型に統合する一方で、横瀬の話者のように(●●○)型の統合もあり、木頭、沢谷などの県南中央山分をのぞいて変化の兆がある。これに対して県西山分地方では、八千代、

出合、山城谷などの各地に東京式アクセントが出現しはじめ、さらに、祖谷(菅生)、三名などの県北中央山分地方で(○●○)型の統合が起りかけている。

[Ⅲ] まとめ

以上、一・二・三音節語の方言アクセントを語類別にとりあげて、中高年層と若年層を比較した。中高年層の方言アクセントについては、すでに「徳島県のアクセント概観」で考察したが、これを若年層の現状と比較すると、つぎのようにまとめることができる。

[1] 徳島市式(京阪式)、および池田式(高松式)など、二音節名詞アクセントの語類統合…(4)、の本県里分地方では、方言アクセントの変化が比較的ゆるやかで、アクセント式が構造的変化をおこすほどにはなっていない。

[2] 出合式、一宇・山城谷式、祖谷・木頭式(埴井式)など、二音節名詞アクセントの語類統合…(3)、の山分アクセント地方では、県南中央山分の木頭地方をのぞいて変化がいちじるしく、従来の語類統合が崩れて再編の過渡期にある。

[3] 特徴を一言すると、徳島県の山分アクセントが、同次式の東京式アクセントの方向に再編中という状況である。その傾向は、1960年代後半の出生者から顕著となり、1970年代前半の出生者に、東京式、または最近似の東京式アクセントが出現するという構造的な変化にまで進展している。

徳島県の山分アクセントに起りつつある構造的な変化が、いかなる事情によるのか、また、どのような方言アクセントにおちつくのか(まとまるのか)、今後の動向に注目し、再考学習したい。

この調査にあたり、直接に協力と御支援をしてくださった多数の方々——中高年の方々のあたたかい御教示、小学校・中学校・高等学校の先生方、職員の方々の御好意、そして、元気に気持ちよく応答してくださった児童、生徒さんの御協力——に、心から御礼申し上げます。ありがとうございました。

1989. 12. 3.

[Ⅳ] 分布図

別紙に記録分を参照。

[Ⅴ] 参考資料

- | | | |
|----------|---------------------------|------|
| 1. 金沢治 | 「阿波言葉のアクセント」 | 昭 9 |
| 2. 金沢治 | 「阿波に於けるアクセントの研究」 | 昭 26 |
| 3. 生田早苗 | 「近畿アクセント圏辺境地区の諸アクセントについて」 | 昭 26 |
| 4. 平山輝男 | 「四国方言のアクセント体系とその系譜」 | 昭 32 |
| 5. 山名邦男 | 「徳島県下の音調」 | 昭 32 |
| 6. 森 重幸 | 「徳島県のアクセント概観」 | 昭 34 |
| 7. 徳川宗賢 | 「日本語方言アクセントの系譜試論」 | 昭 37 |
| 8. 森 重幸 | 「分布図から見た徳島県の方言」その四、その五 | 昭 39 |
| 9. 金田一春彦 | 『国語アクセントの史的研究 原理と方法』 | 昭 49 |
| 10. 森 重幸 | 「徳島県池田町出合アクセントと川崎アクセント」 | 昭 59 |
| 11. 上野善道 | 「下降式アクセント」 | 昭 61 |

以上。

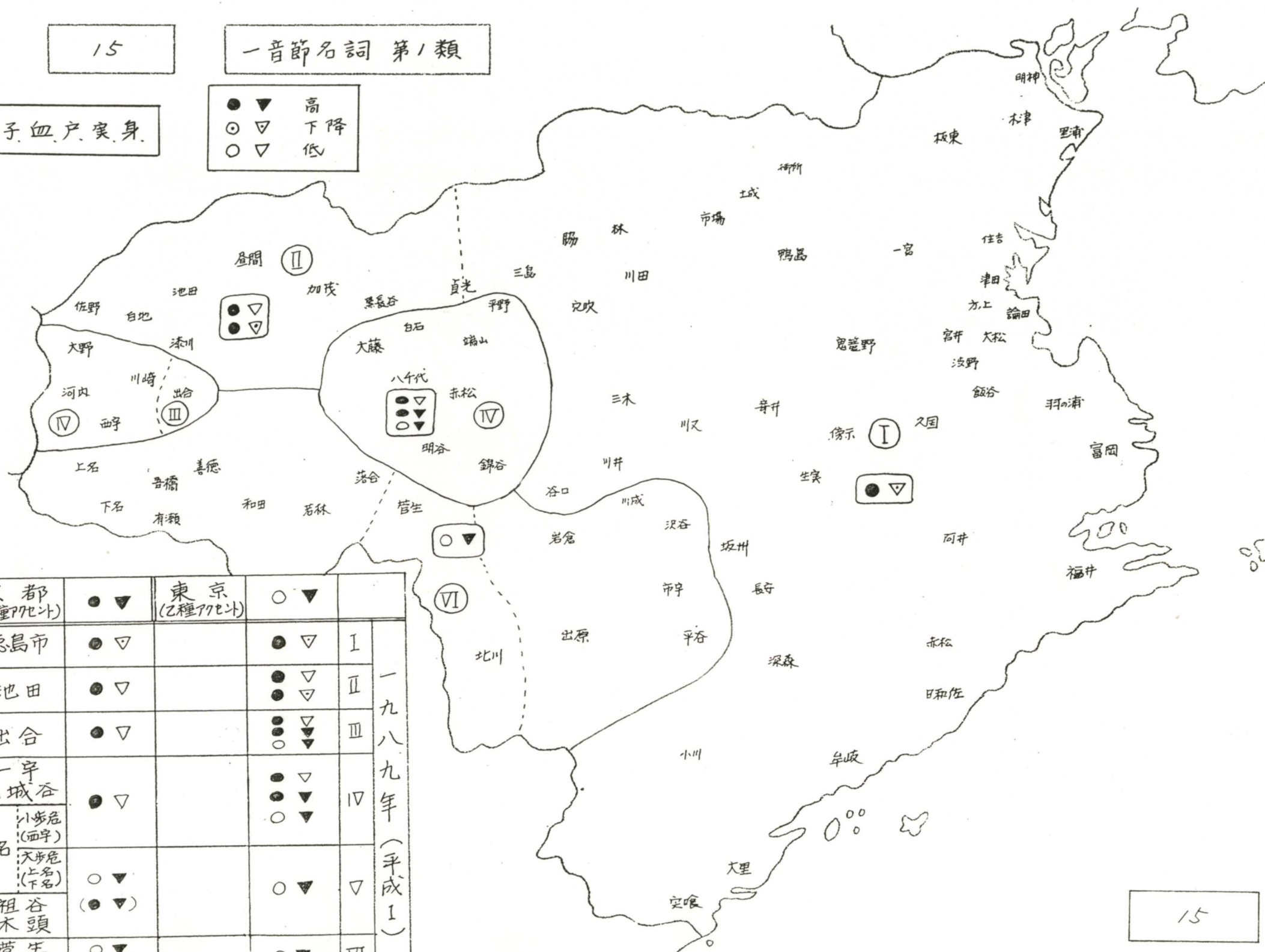
柄 蚊 子 血 戸 実 身

15

一音節名詞 第1類

● ▼ 高
○ ▼ 下降
○ ▼ 低

	京 都 (甲種アベシ)	東 京 (乙種アベシ)	
一九五七年(昭和32)	I 徳島市	● ▼	I
	II 池田	● ▼	II
	III 出合	● ▼	III
	IV 一宇 山城谷	● ▼	IV
	小歩危 (西字)	● ▼	
	三名 大歩危 (上名)	○ ▼	
	下名	○ ▼	
	V 祖谷 木頭	(● ▼)	V
	VI 菅生 北川	(○ ▼)	VI
			一九八九年(平成1)



15

16

一音節名詞 第2類

名、葉、日、葉、矢

		京 都 (甲種アベ斗)	● ▼	東 京 (乙種アベ斗)	○ ▼		
一九五七年 (昭和32)	I	徳島市	● ▼		● ▼ ● ▼	I	一九八九年 (平成1)
	II	池田	● ▼		● ▼ ● ▼	II	
	III	出合	● ▼		● ▼ ● ▼ ○ ▼	III	
	IV	一宇 山城谷	● ▼		● ▼ ○ ▼	IV	
		三名 小歩危 (西宇)					
	V	三名 大歩危 (上名)	● ▼ ● ▼			● ▼ ○ ▼	
祖谷 木頭							
VI	菅生 北川	● ▼ ● ▼			● ▼ ○ ▼	VI	



16

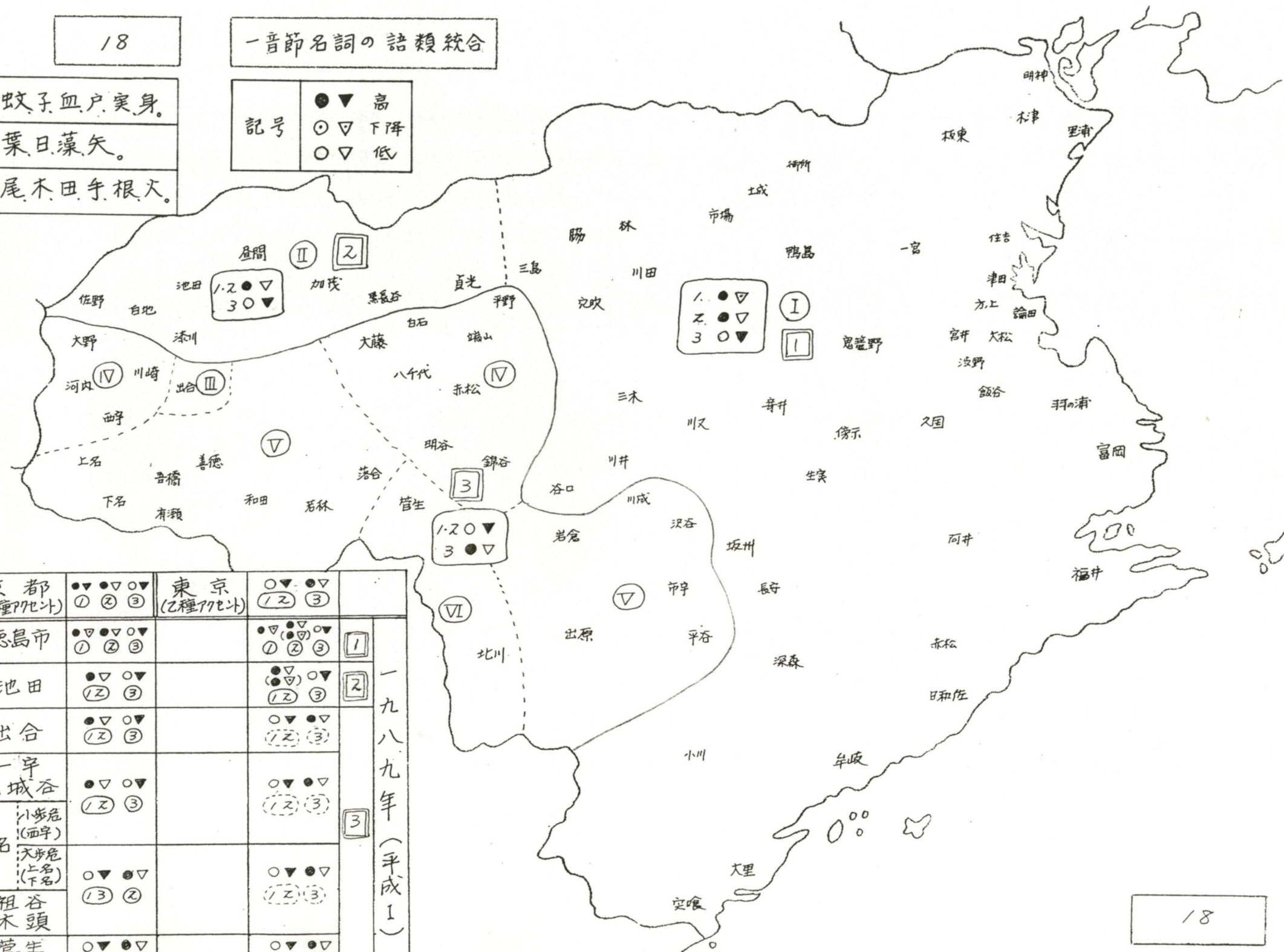
18

一音節名詞の語類統合

1.	柄、蚊子、血、戸、突、身。
2.	名、葉、日、藻、矢。
3.	絵、尾、木、田、手、根、大。

記号	● ▼ 高
	○ ▼ 下降
	○ ▼ 低

	京都 (甲種7地点)	東京 (乙種7地点)	
一九五七年(昭和32)			一九八九年(平成1)
I	徳島市		I
II	池田		II
III	出合		III
IV	一宇 山城谷		IV
	小歩危 (西宇)		
	三名		
V	大歩危 (上名)		V
	下名		
	祖谷 木頭		
VI	菅生 北川		VI



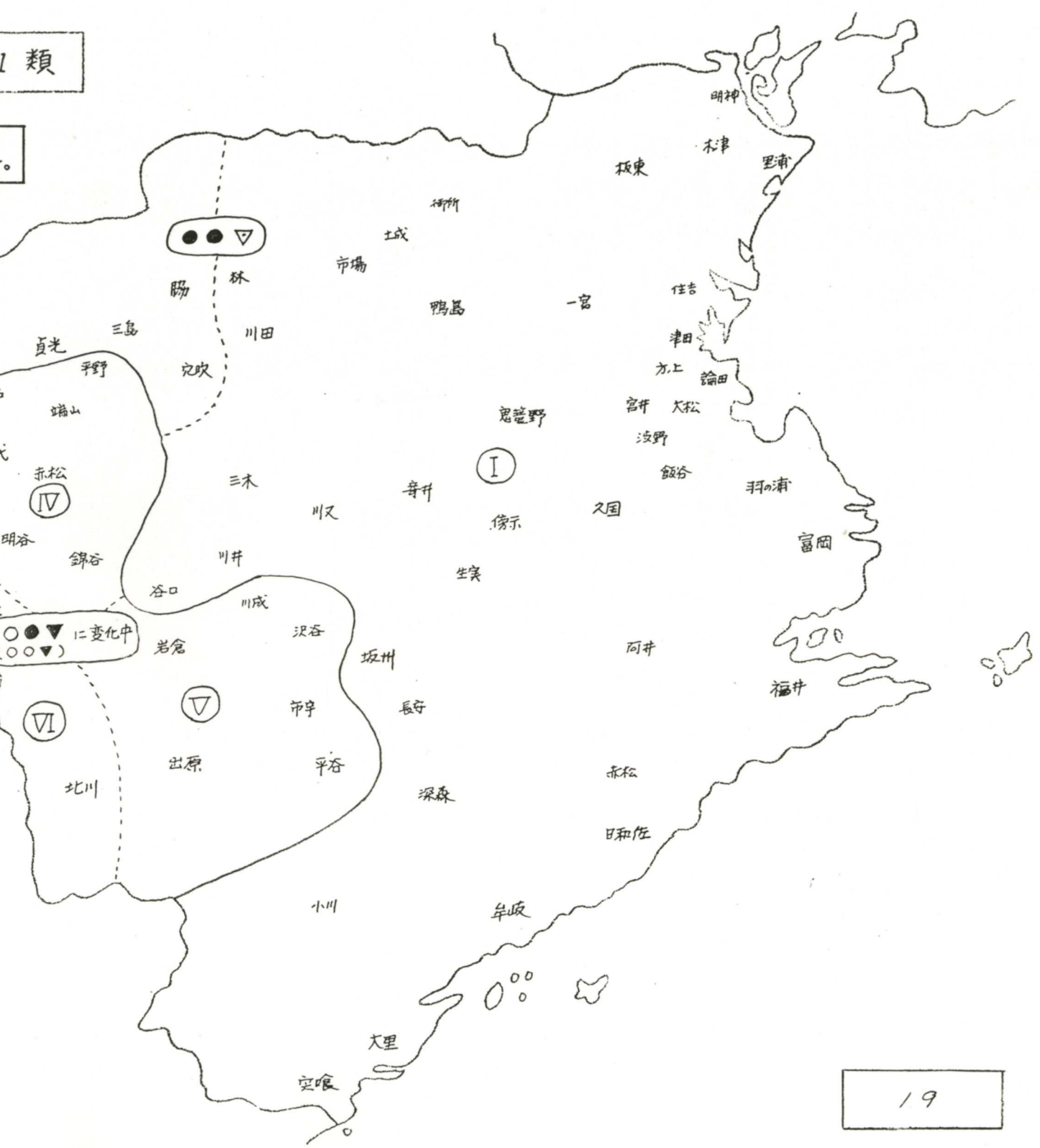
18

19

二音節名詞 第1類

飴、梅、板、顔、風、酒、鼻、桃、牛、柿、口、首、鳥、水道。

		京 都 (甲種7地)	● ● ▼	東 京 (乙種7地)	○ ● ▼		
一九五七年 (昭和32)	I	徳島市	● ● ▼		● ● ▼	I	一九八九年 (平成1)
	II	池田	● ● ▼		● ● ▼	II	
	III	出合	(● ○ ▼) (● ● ▼)	(● ● ▼) (● ○ ▼) (● ● ▼)	○ ● ▼ ○ ○ ▼	III	
	IV	一宇 山城谷	○ ● ▼ (● ● ▼) (● ● ▼)		(○ ● ▼) (● ● ▼) ○ ● ▼ (○ ○ ▼)	IV	
		小歩危 (西宇) 三名	(● ● ▼)				
	V	大歩危 (上名) 祖谷 木頭	○ ● ○ ● ▼ ● ● ▼		○ ● ▼ (○ ○ ▼)	V	
		菅生 北川	○ ● ▼ ○ ○ ▼		○ ● ▼ (○ ○ ▼)		
VI					VI		



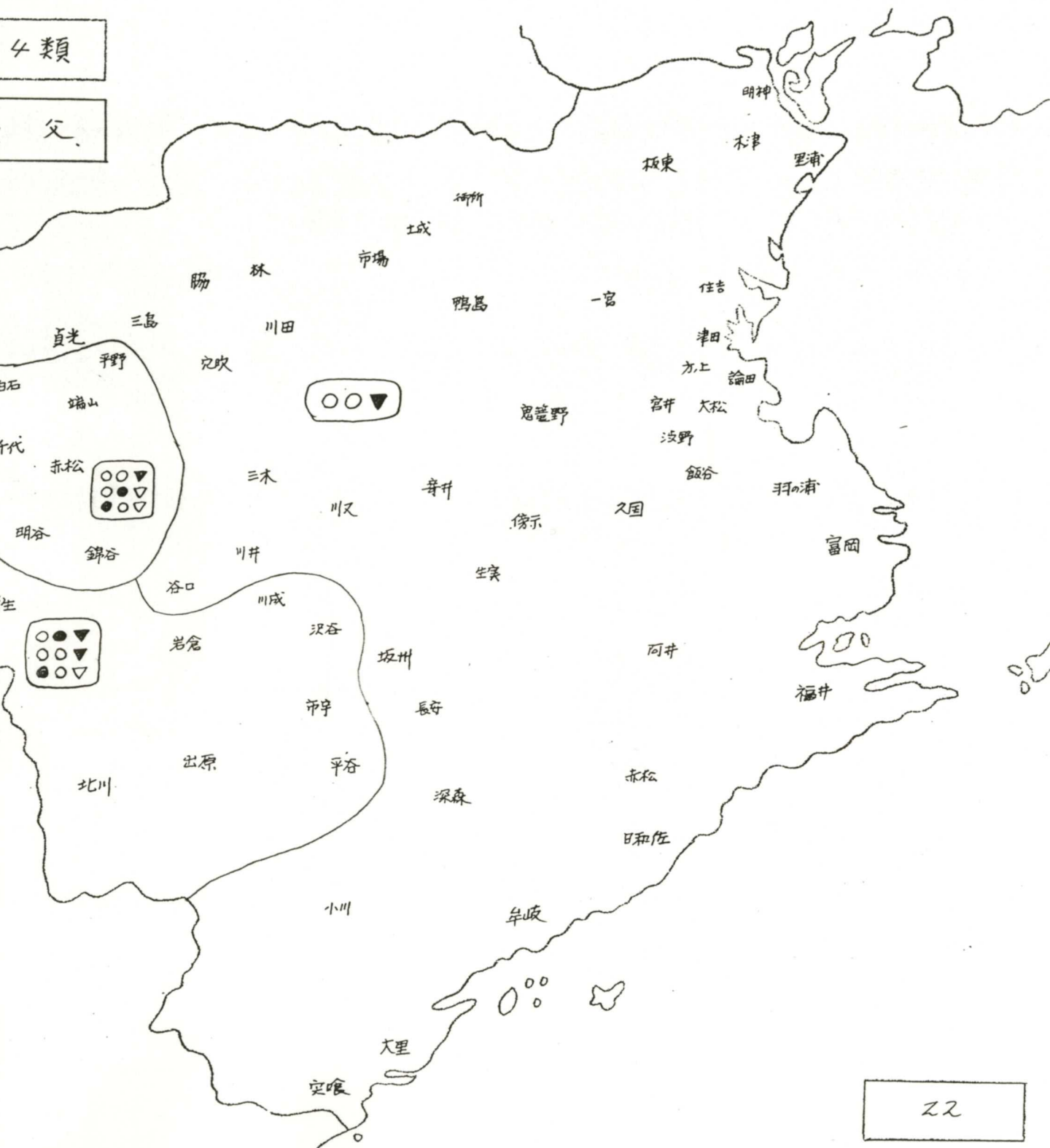
22

二音節名詞 第4類

栗系箱笠肩倉下空舟息松帶箸 海父

	京都 (甲種7地区)	〇〇▼	東京 (乙種7地区)	●〇▼	
一九五七年(昭和32)	I 徳島市	〇〇▼		〇〇▼	I
	II 池田	〇〇▼		〇〇▼	II
	III 出合	〇〇▼		〇〇▼ ●●▼	III
	IV 一宇 山城谷	〇〇▼		〇〇▼ 〇●▼ ●〇▼	IV
	V 三名	小歩危 (西字)		〇〇▼ ●〇▼	V ₁
		大歩危 (上名)		〇●▼ ●●▼	
	VI 菅生 北川	祖谷 木頭		〇●▼ ●●▼ 〇〇▼ ●〇▼	VI ₂
				〇●▼ 〇〇▼ ●〇▼	

一九八九年(平成1)



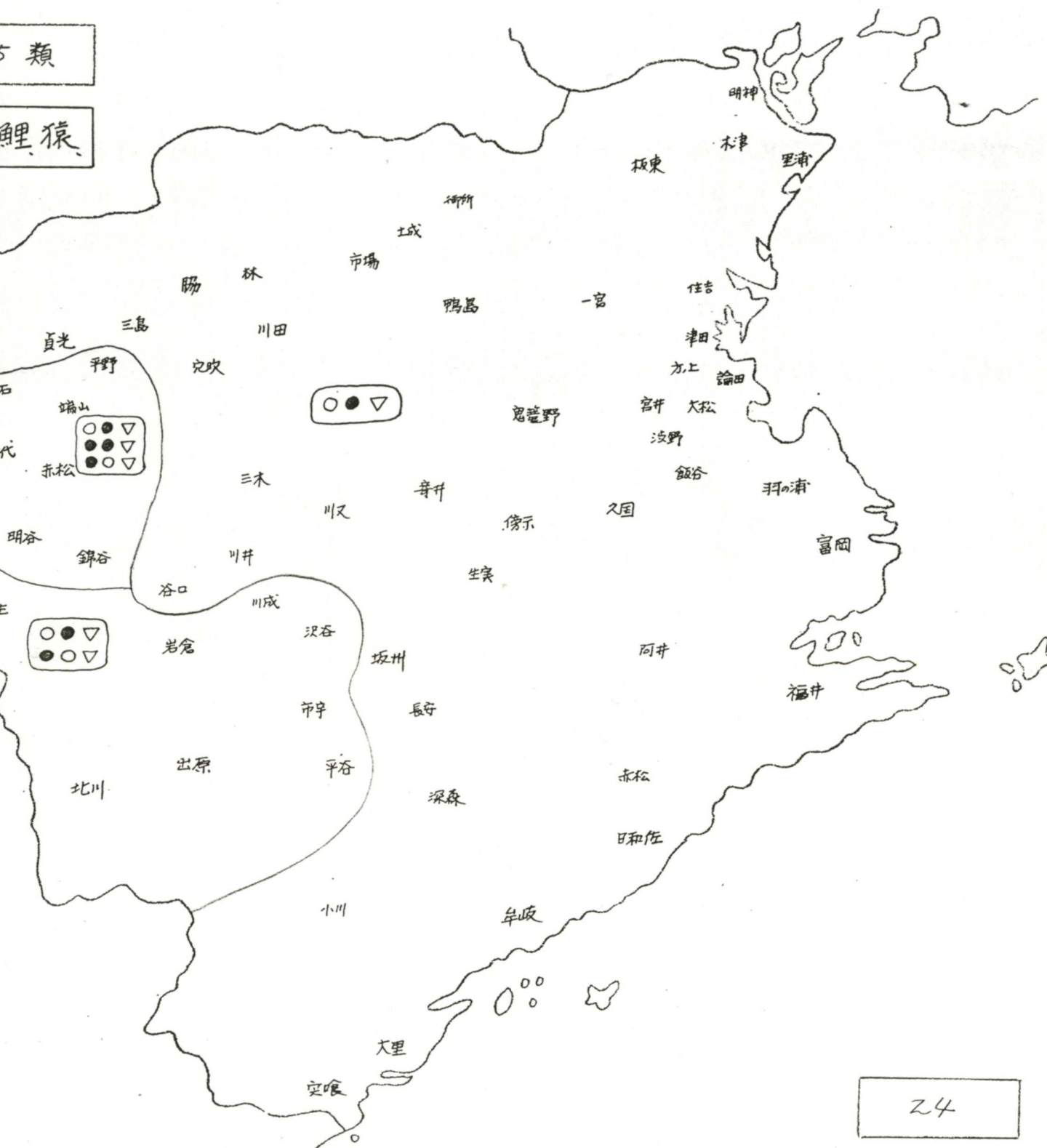
22

24

二音節名詞 第5類

雨、井、桶、蔭、声、蜘蛛、琴、鮎、窓、蛇、秋、鮎、黍、鯉、猿

		京都 (甲種アベシ)	○●▽	東京 (乙種アベシ)	●○▽		
一九五七年 (昭和32)	I	徳島市	○●▽		○●▽	I	一九八九年 (平成1)
	II	池田	○●▽		○●▽	II	
	III	出合	○●▽		○●●▽ ●●●▽ ●●○▽	III	
	IV	一宇 山城谷	○●▽		○●●▽ ●●●▽ ●●○▽	IV	
		三名 小歩危 (西宇)					
	V	三名 大歩危 (上名)	○●●▽ (●○●▽)		○●●▽ ●●○▽	V	
		祖谷 木頭					
VI	菅生 北川	○●▽		○●●▽ ●●○▽	VI		



24

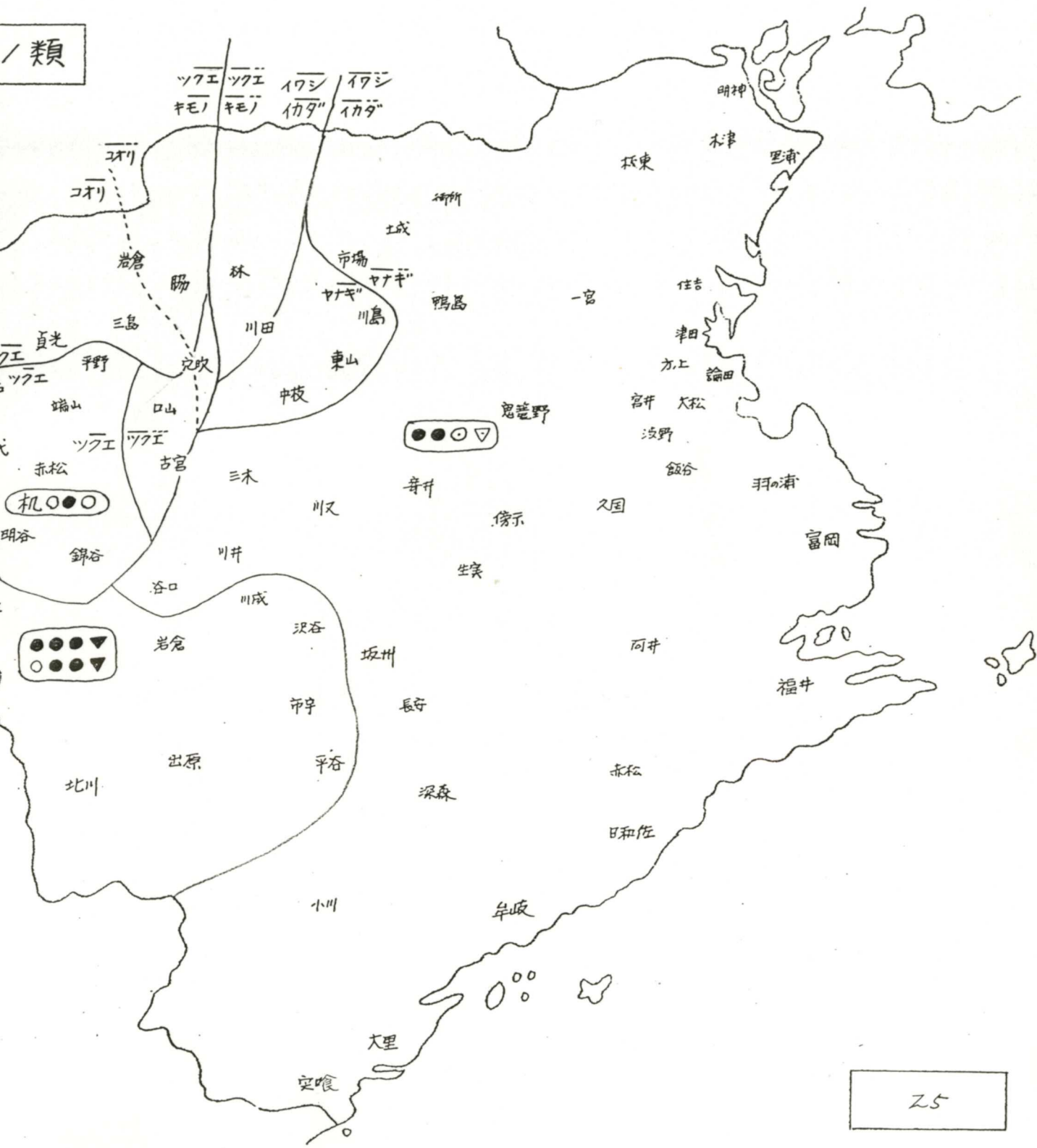
25

三音節名詞第1類

筏、鰯、着、米、机、柳

分布図は1957年(昭32)当時の
中学校3年生を主対象とした調査で、
現在、50才前後の中年層のもの。
現在の若年層では、
ヤナギが県北里分で
やや東進し、さらに、
海部郡下灘地方の
大里、早岐、那賀郡
深森、長安で散見される。
また、県西山分地方で
〇●●▽型になる
ことがある。

		京都 (甲種77セト)	東京 (乙種77セト)		
一九五七年(昭和32)	I	徳島市	●●●○▽	●●●○▽	I
	II	池田	○●●●▽	○●●●▽	II
	III	出合	○●●●▽	○●●●▽	III
	IV	一早山城谷	○●●●▽	○●●●▽ (○●●●▽)	IV
	V	三名 小歩危(西字) 大歩危(上名) 大歩危(下名)	●●●●▽ ○●●●▽	●●●●▽ ○●●●▽	V
		祖谷 木頭	○●●●▽	○●●●▽	
	VI	菅生 北川	○●●●▽	○●●●▽	VI



25

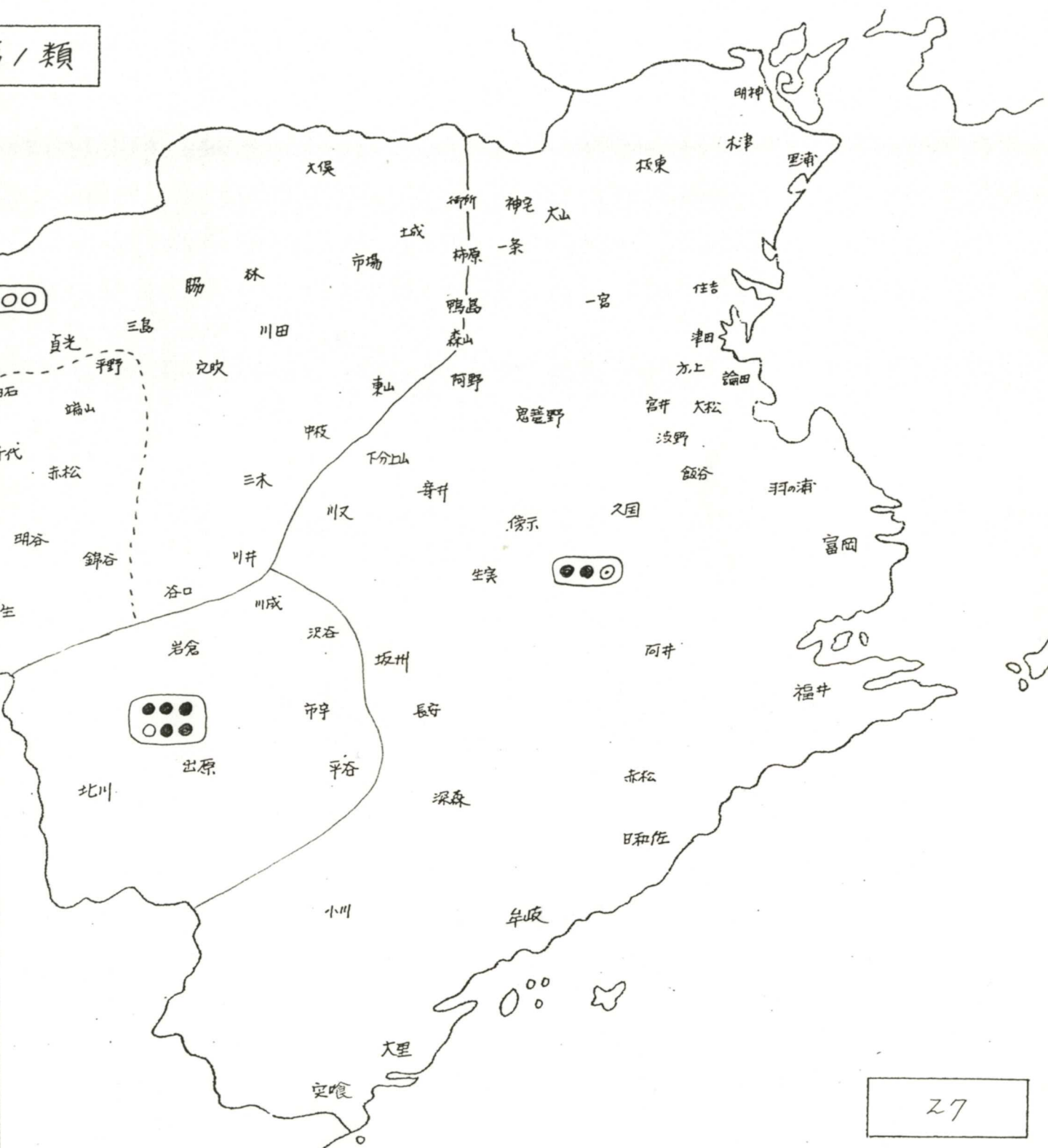
27

三音節名詞 第1類

形

県東部の ●○○・●●○
境界地帯での競合関係は、
現在調査中である。
県西山分地方を中心に
第1類に共通する
変化がみられている。

	京都 (甲種77位)	●●●	東京 (乙種77位)	○○●	
一九五七年(昭和32)	I 徳島市	●●○		●●○	I
	II 池田	●○○		●○○	II
	III 出合	●○○			III
	IV 一宇 山城谷	●○○		●○○ (○○○) (○○●▽) (○○●▽)	IV
	V 三名 大歩危 (下名)	●○○			V
	VI 祖谷 木頭	●●●		●●●	VI
一九八九年(平成1)	菅生	●○○		●○○	
	北川	○○●		○○●	



27

Z8

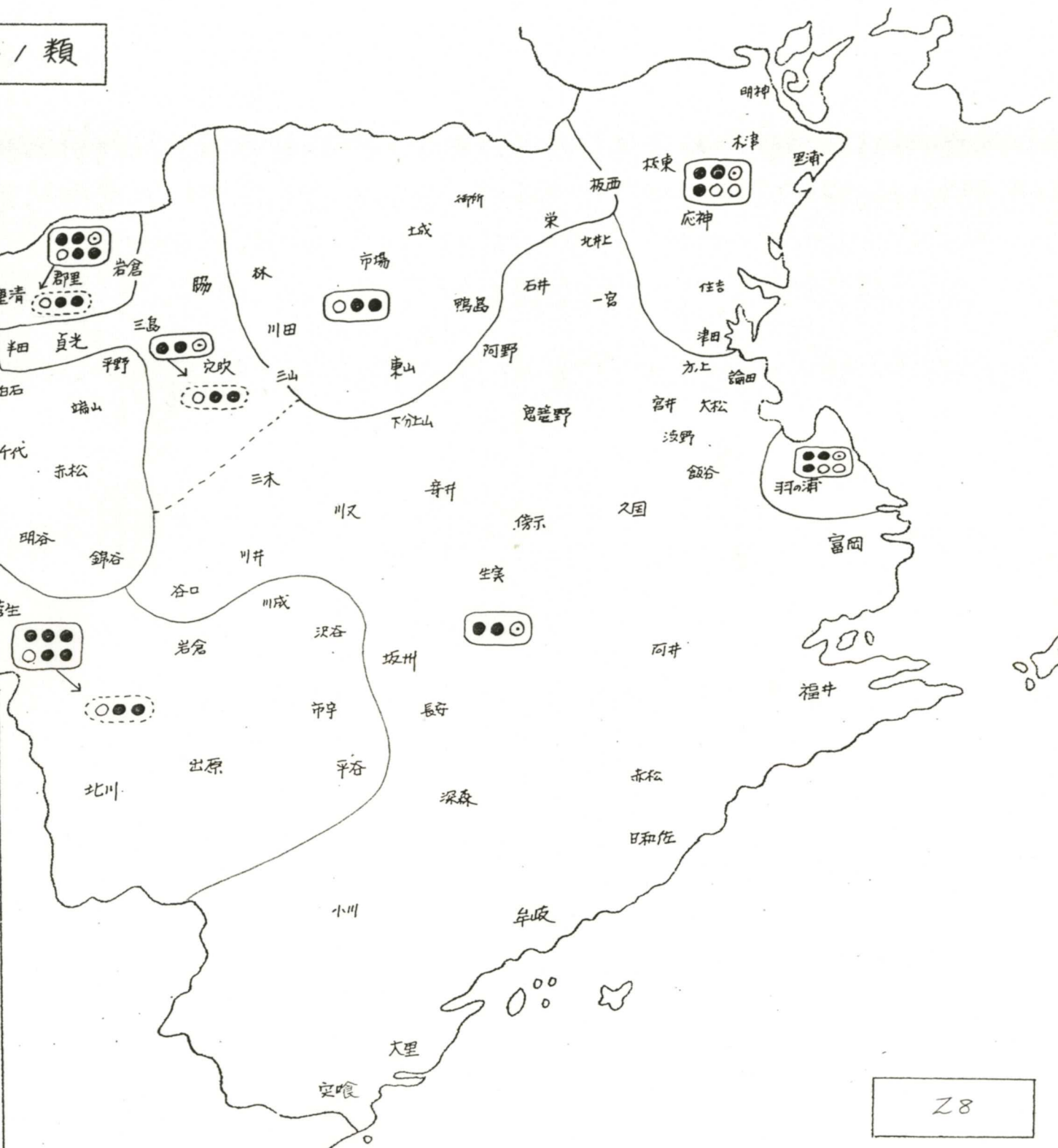
三音節名詞第1類

仔牛

分布図は1957年(昭32)当時の
中学校3年生を主対象とした調査で、
現在、50才前後の中年層のもの。
.....は、若年層のアクセント
変化の大勢をしめすもので
(○●●)の分布が拡大。

県東部沿岸 (●●●)
混用地方の
若年層は (○●●) が
一般的であった。
なお、(○●●▽)が、
海部郡下灘地方に
散見されるほか、
県西山分地方では
(○●●▽)になること
もある。

		京都 (甲種アクセント)	東京 (乙種アクセント)		
一九五七年(昭和32)	I	徳島市		I	一九八九年(平成1)
	II	池田		II	
	III	出合		III	
	IV	一宇山城谷		IV	
		小歩危(西宇)			
	V	三名大歩危(上名)		V	
	VI	祖谷木頭		VI	
		菅生北川			



Z8

29

三音節名詞第1類

鼻血

		京都 (甲種77位)	●●●	東京 (乙種77位)	○●●		
一九五七年 (昭和32)	I	徳島市				I	一九八九年 (平成1)
	II	池田				II	
	III	出合				III	
	IV	一宇 山城谷				IV	
		三名 (小歩危 (西宇) 大歩危 (上名) (下名)					
	V	祖谷 木頭				V	
	VI	菅生 北川				VI	

29

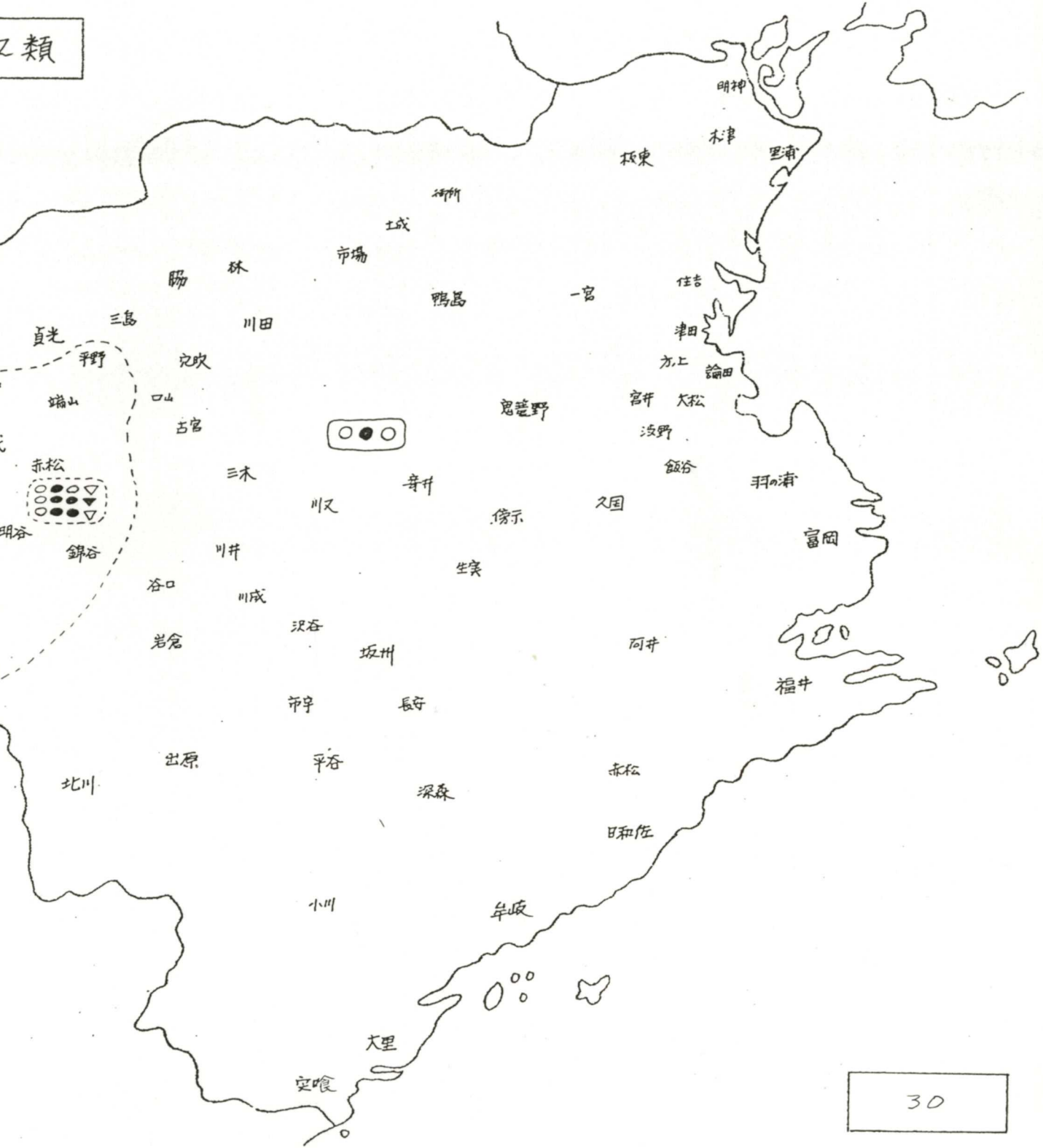
30

三音節名詞第2類

小 蜥 ニ ニ
豆 蛭 ツ 人

県西山分地方では、(○●●▽)型に
変化しはじめている。さらに、
「ニツ・ニ人」などが
東京型(○●●▽)に
なることがある。

		京 都 (甲種アベ斗)	●○○	東 京 (乙種アベ斗)	○●●▽		
一九五七年(昭和32)	I	徳島市	○●○		○●○	I	一九八九年(平成1)
	II	池田	○●○		○●○	II	
	III	出合	○●○			III	
	IV	一宇 山城谷	○●○		○●○ ○●○ ○●○ ○●○	IV	
		小歩危 (西宇)					
	V	三名 大歩危 (上名)			○●○ ○●○ ○●○ ○●○	V	
		祖谷 木頭	○●○		○●○ ○●○ ○●○ ○●○		
	VI	菅生 北川	○●○		○●○ ○●○ ○●○ ○●○	VI	



30

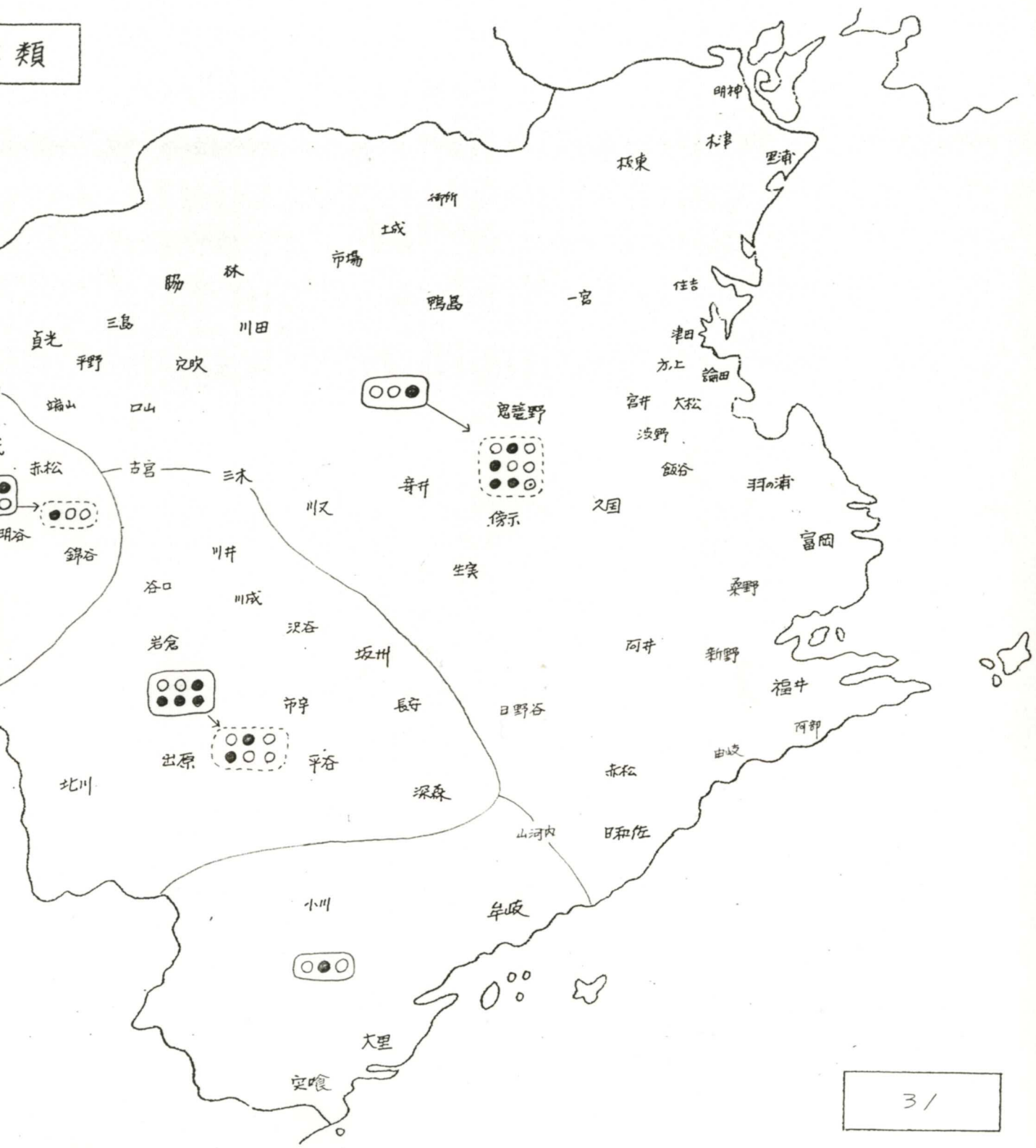
31

三音節名詞第2類

釣瓶

徳島市、池田などの
里分地方では(〇〇●)→
(〇〇〇)→(●〇〇)の
変化をたどっている
ようである。
ただし、海部郡
では、(〇〇〇)の
勢力が強い。
これに対して、
県北中央山分では
(●〇〇)のほか
に(〇●●▽・
〇●●▽)が散見
される。
また、釣瓶を理解できない若年層の
アクセントは、すべて平板型(●●●▽)である。

京都 (甲種アクセント)		東京 (乙種アクセント)			
一九五七年(昭和32)	I 徳島市	〇〇●		●●〇 ●●〇	I
	II 池田	〇〇●		●●〇 ●●〇	II
	III 出合	〇〇● ●●●		●●〇 (〇●●)	III
	IV 一宇 山城谷	〇〇●		●●〇 (〇●●)	IV
		小歩危 (西宇)			
	V 三名 大歩危 (下名)	〇〇●		●●〇 ●●〇 (〇●●▽)	V
		祖谷 木頭			
	VI 菅生 北川	●●● ●●●		●●〇 ●●〇	VI



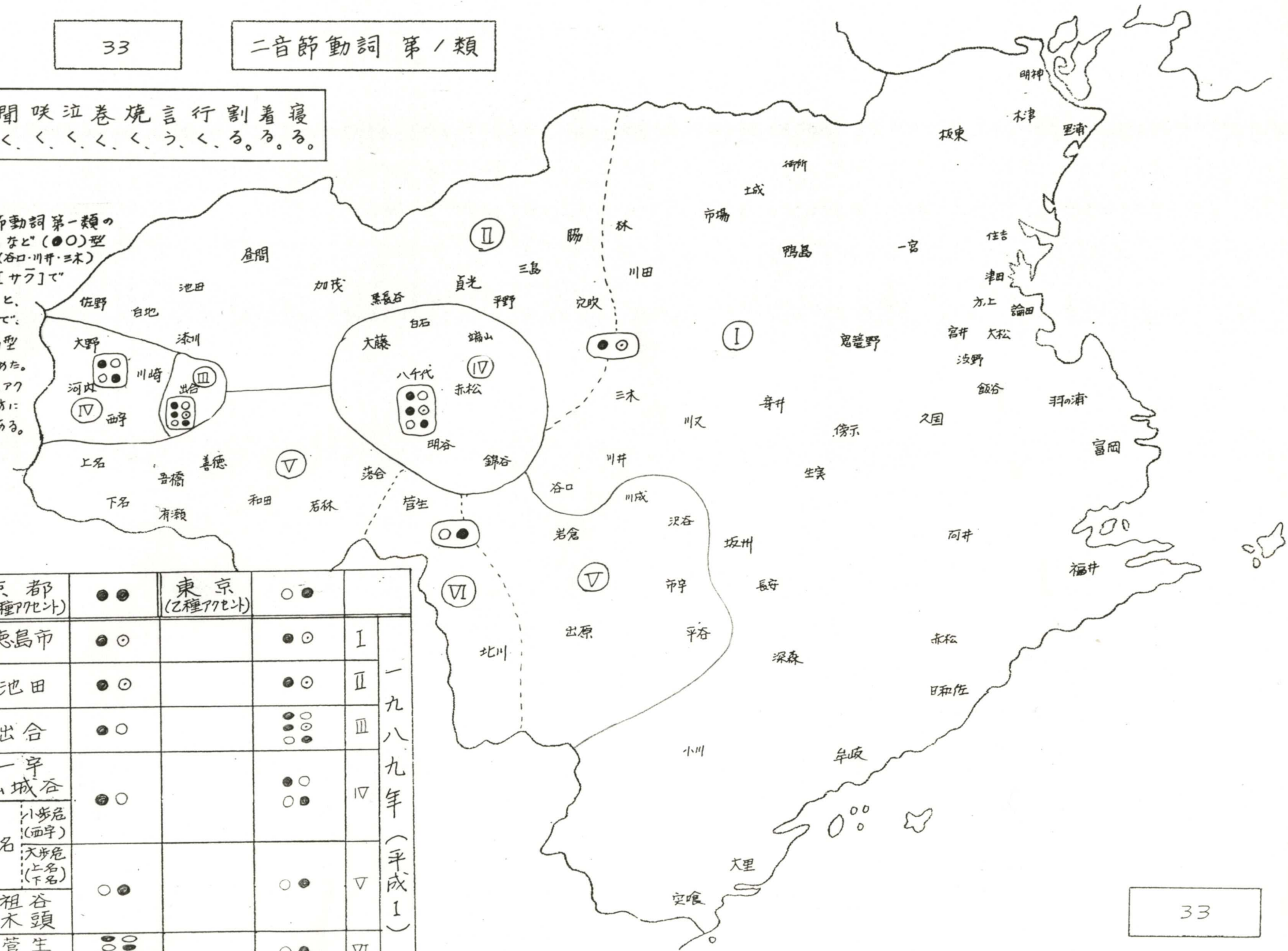
33

二音節動詞 第1類

売置買聞咲泣巻焼言行割着寝
る、く、う、く、く、く、く、う、く、る、る、る。

中年層の場合、二音節動詞第一類の「咲く」が、一字、端山など(●○)型の地方、および木屋平(谷口・川井・三木)など(●○)型の地方で「サフ」であった。若年層を見ると、(●○)型地方の全域で、第一類の全語彙が尾高型(○●)型に変化しはじめた。これを要するに、東京型アクセントが本県の山分地方に拡大しつつある状況である。

		京都 (甲種アクセント)	● ●	東京 (乙種アクセント)	○ ●		
一九五七年 (昭和32)	I	徳島市	● ○		● ○	I	一九八九年 (平成1)
	II	池田	● ○		● ○	II	
	III	出合	● ○		● ○ ● ○ ○ ●	III	
	IV	一宇 山城谷	● ○		● ○ ○ ●	IV	
		三名	小歩危 (西字) 大歩危 (上名) (下名)				
	V	祖谷 木頭	○ ●		○ ●	V	
VI	菅生 北川	● ● ● ●		○ ●	VI		

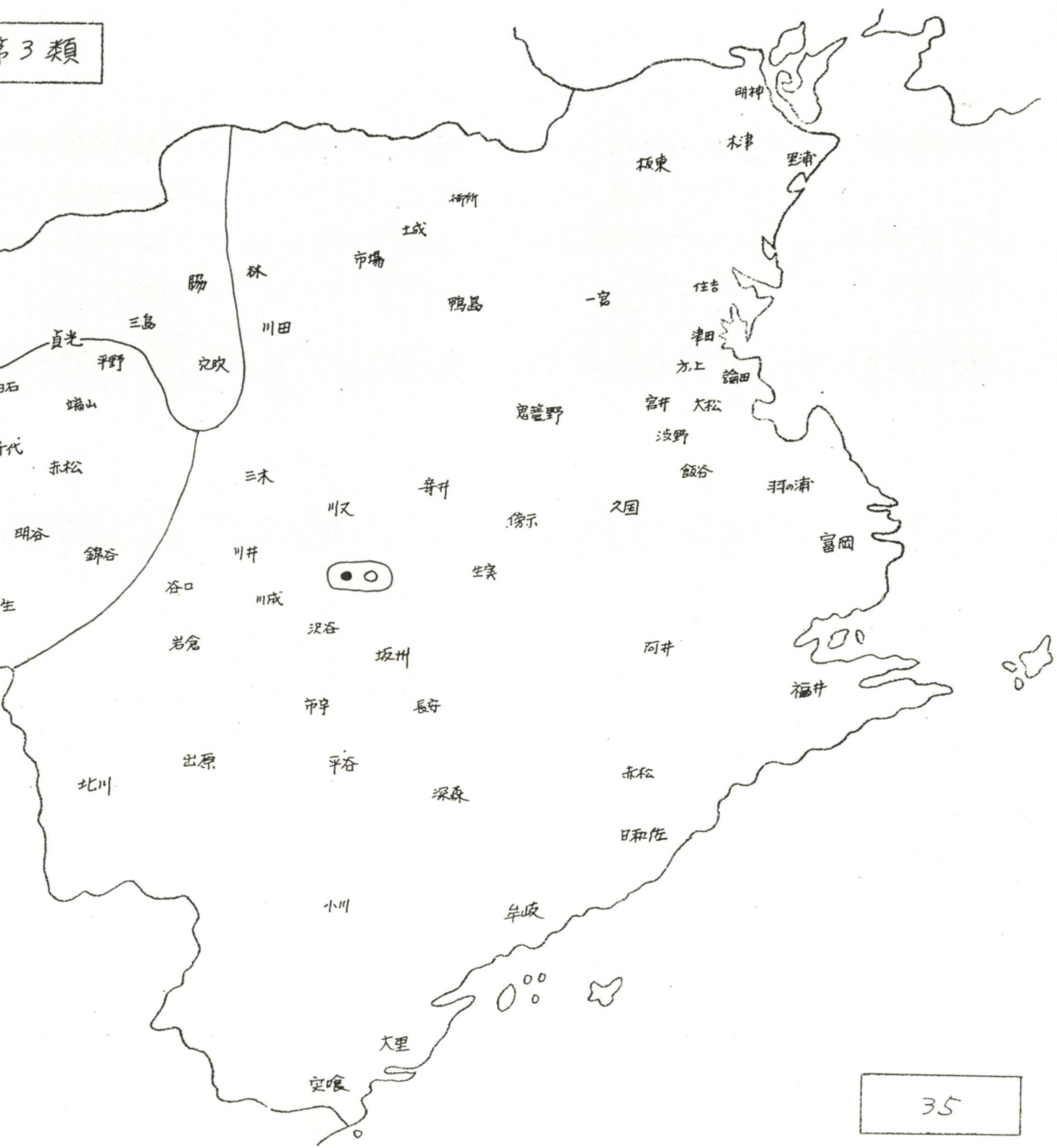


35

二音節動詞第3類

居る

		京都 (甲種アベト)		東京 (乙種アベト)		
一九五七年 (昭和32)	I	徳島市			● ○	I
	II	池田			● ○	II
	III	出合			● ○ ○ ●	III
	IV	一宇 山城谷			● ○ ○ ●	IV
		三名 小歩危 (西宇) 大歩危 (上名) (下名)			● ○ ○ ●	V ₁
	V	祖谷 木頭			● ○ ○ ●	V ₂
	VI	菅生			● ○ ○ ●	VI ₁
		北川			● ○	VI ₂



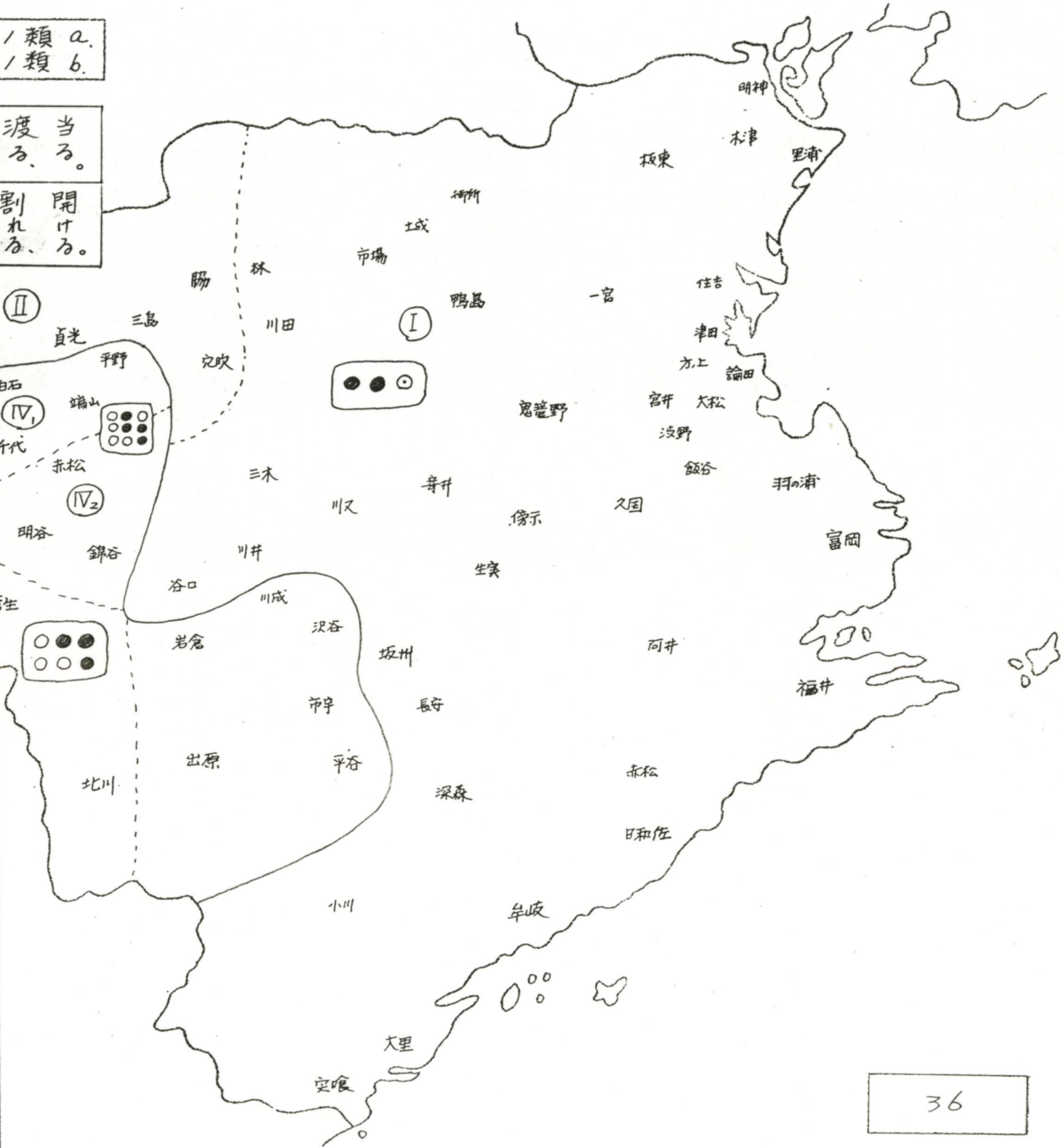
35

36

三音節動詞 第1類 a.
第1類 b.

a	上る、ぶる、登る、拾う、運ぶ、進む、殺す、変る、語る、洗う、通う、渡る、当る。
b	上げる、植える、借りる、消える、捨てる、負ける、染める、漬ける、腫れる、曲げる、焼ける、割れる、開ける。

		京都 (甲種アベシ)	東京 (乙種アベシ)		
一九五七年 (昭和32)	I	徳島市	●●●○	●●●○	I
	II	池田	●●●○	●●●○	II
	III	出合	●○○○	○○●○	III
	IV ₁	端山	●●●○	●●●○	IV
	IV ₂	一字	●●●○	○○●○	IV
		山城谷	●●●○	●●●○	
	V	小歩危 (西字)	●●●○	○○●○	V
		大歩危 (上名)	●●●○	○○●○	
	VI	祖谷 木頭	●●●○	○○●○	VI
		管生 北川	○○●○	○○●○	



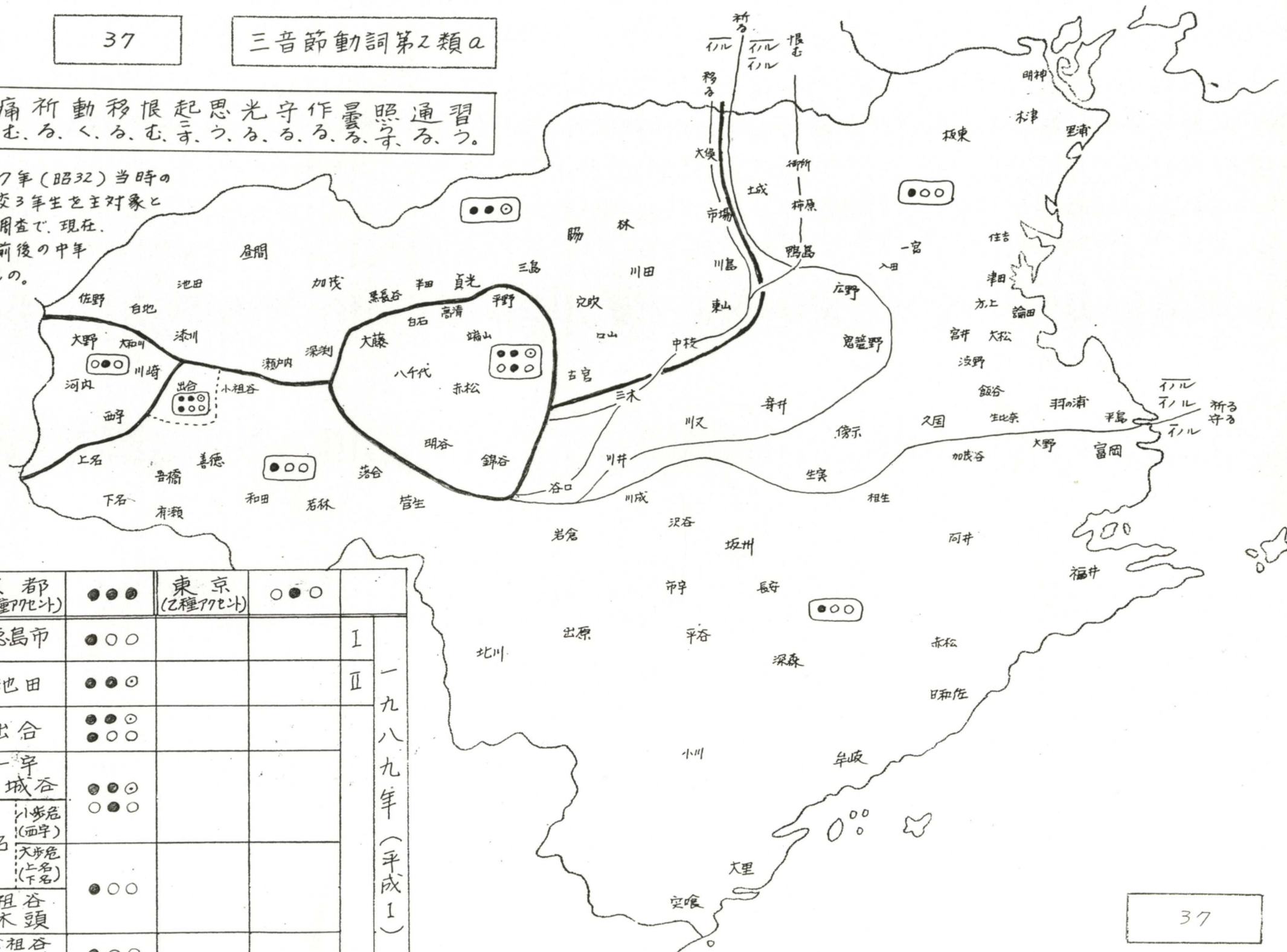
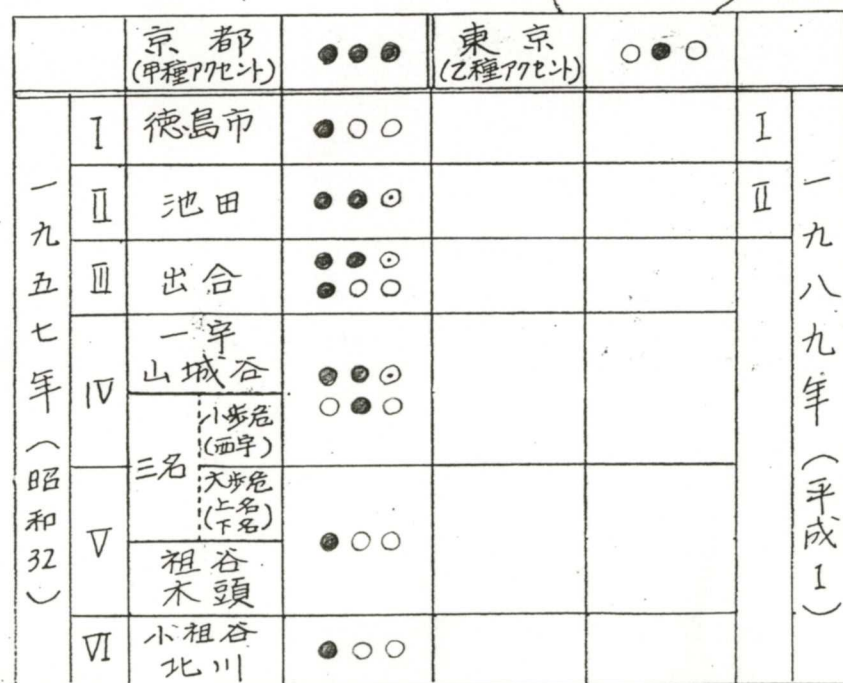
36

37

三音節動詞第2類a

余痛祈動移恨起思光守作曇照通習
るむるくむすうるるるるるるるるるる

1957年(昭32)当時の
中学校3年生を主対象と
した調査で、現在、
50才前後の中年
層のもの。

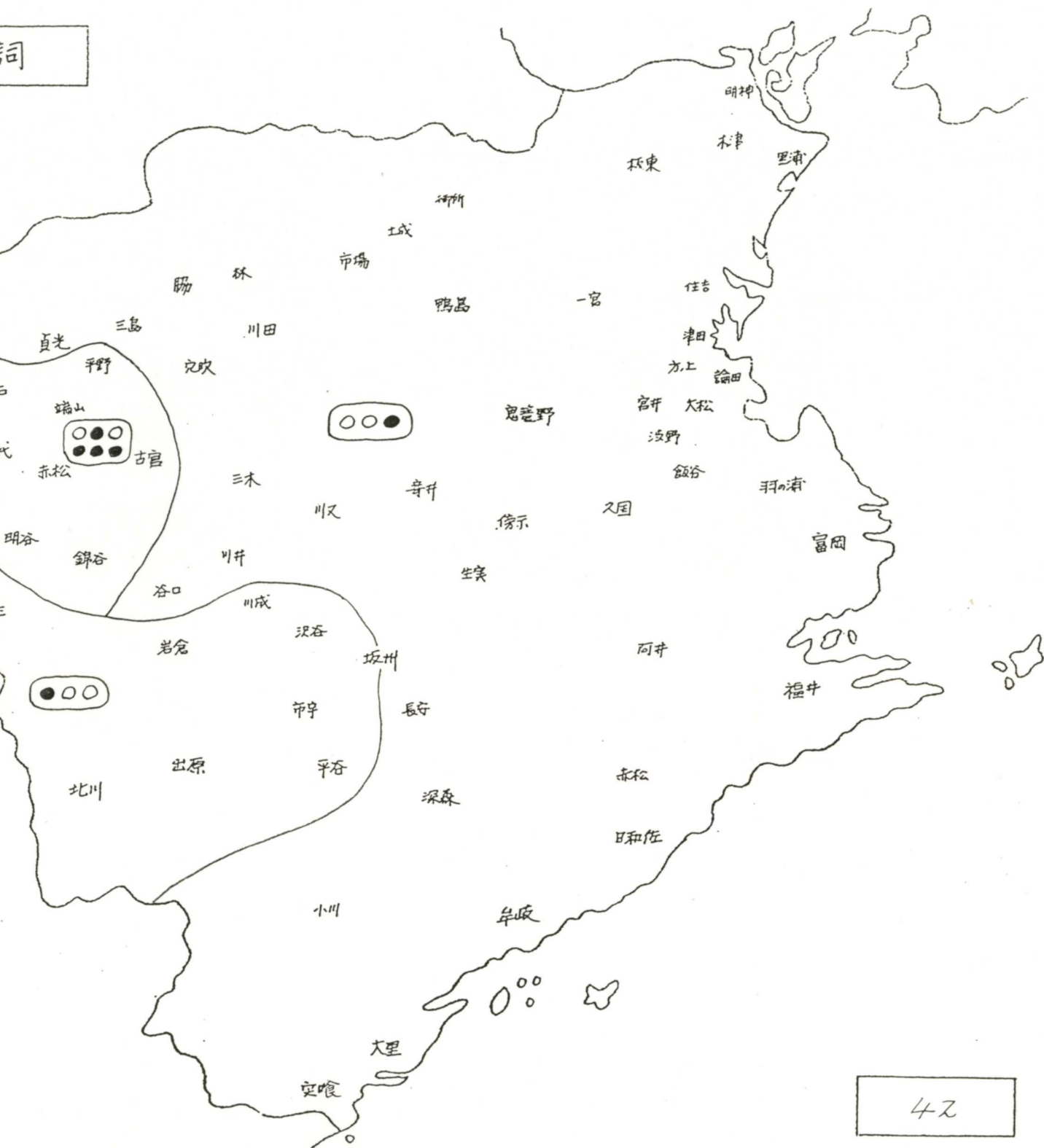


42

三音節動詞

隠す

		京 都 (甲種7地)	〇〇●	東 京 (乙種7地)	〇●〇		
一九五七年 (昭和32)	I	徳島市	〇〇●			I	一九八九年 (平成1)
	II	池田	〇〇●			II	
	III	出合	〇●〇 ●●●			III	
	IV	一宇 山城谷	〇●〇 ●●●			IV	
		三名 小歩危 (西宇)	〇●〇 〇〇●				
	V	三名 大歩危 (上名) 下名	●〇〇			V	
VI	祖谷 木頭 菅生 北川	●〇〇			VI		

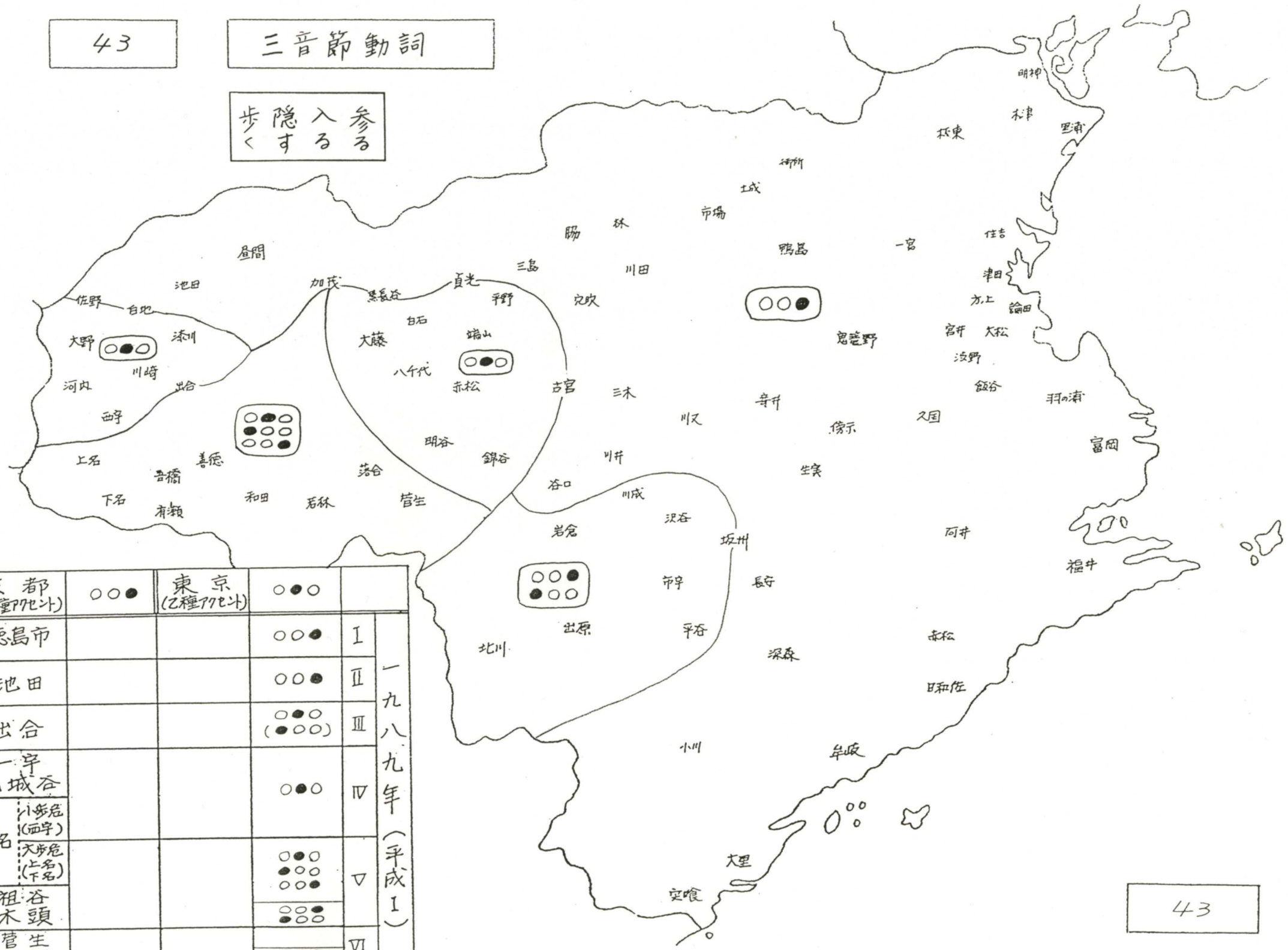


42

43

三音節動詞

歩 隠 入 参
く す る る



		京都 (甲種77位)	東京 (乙種77位)		
一九五七年(昭和32)	I	徳島市		〇〇●	I
	II	池田		〇〇●	II
	III	出合		〇●〇 (●〇〇)	III
	IV	一宮 山城谷		〇●〇	IV
	V	三谷 小谷 (西字)		〇●〇	V
		大谷 (上名)		〇●〇 〇●〇 〇●〇	
	VI	祖谷 木頭 菅生 北川		〇●〇 〇●〇 〇●〇	VI

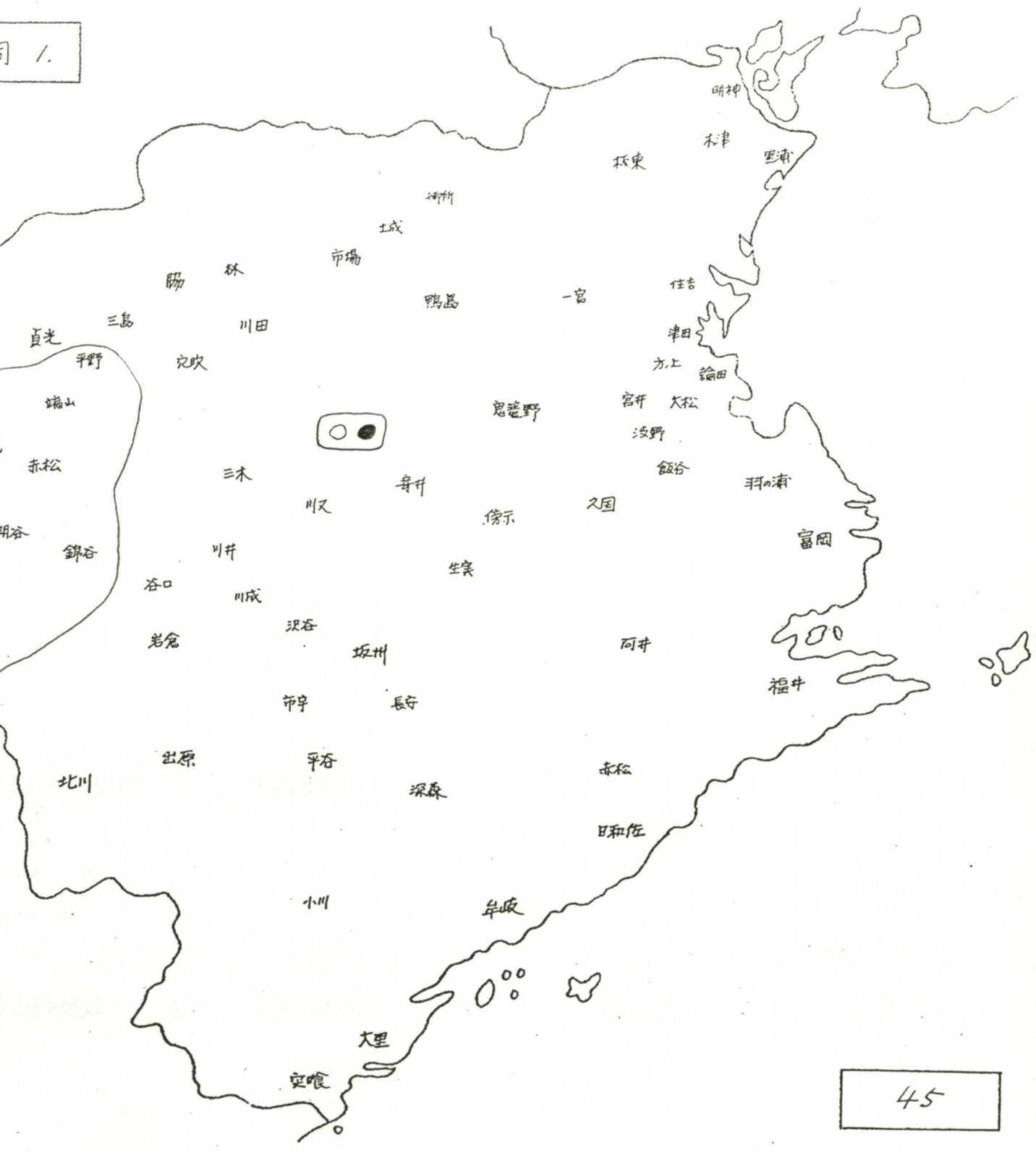
43

45

二音節形容詞 1.

無良
い い

		京都 (甲種アビ斗)	●●	東京 (乙種アビ斗)	●●		
一九五七年(昭和32)	I	徳島市	●●		●●	I	一九八九年(平成1)
	II	池田	●●		●●	II	
	III	出合	●●		●●	III	
	IV	一宇 山城谷	●● ●●		●● (●●)	IV	
		三名 小歩危 (西宇) 大歩危 (下名)	●●		●● (●●)		
	V	祖谷 木頭	●●		●● ●●	V	
	VI	菅生 北川	●●		●● ●●	VI	



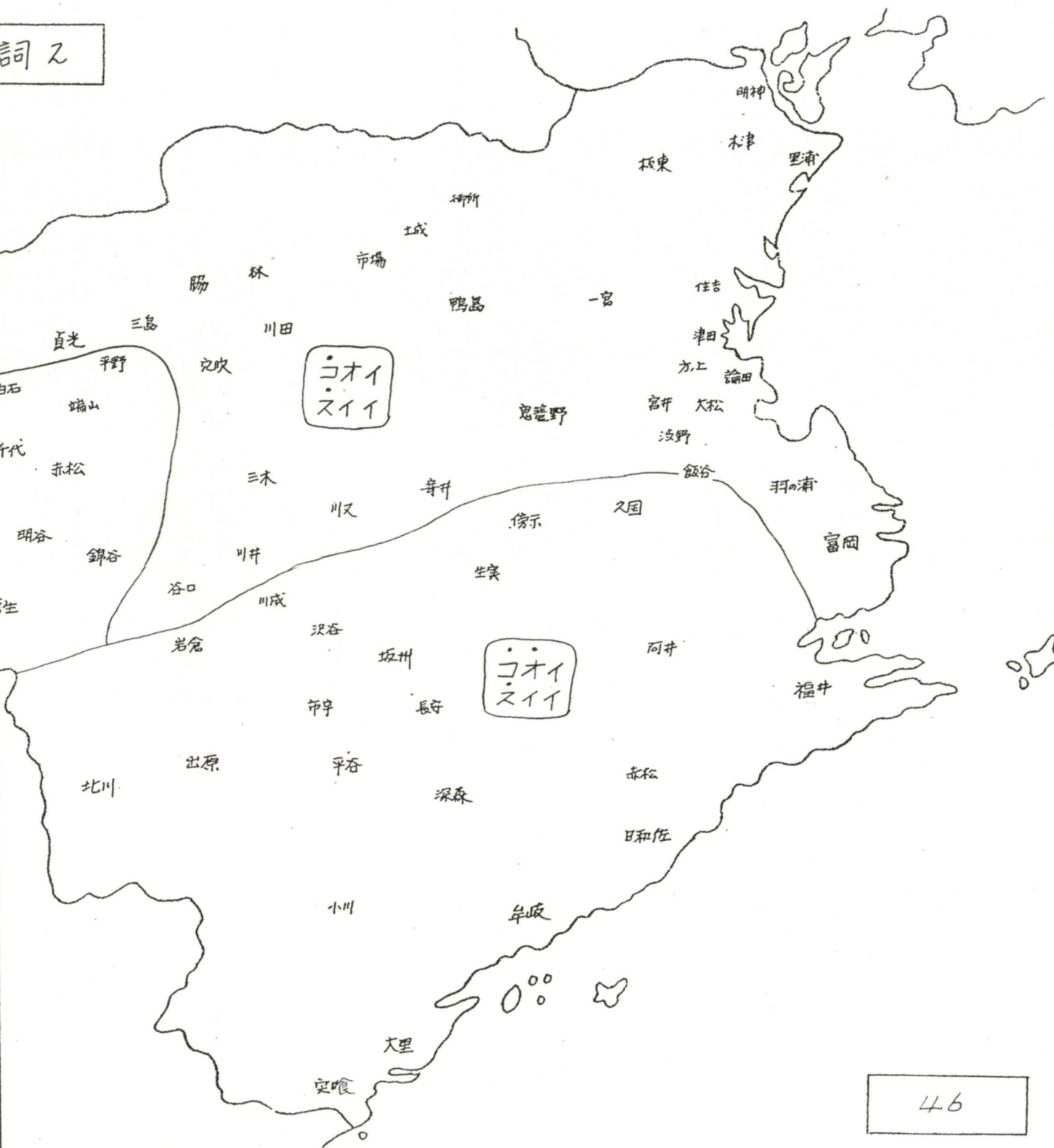
45

46

二音節形容詞ス

酸濃
い い

		京都 (甲種アベシ)		東京 (乙種アベシ)		
一九五七年 (昭和32)	I	徳島市			●○○	I
	II	池田			●○○	II
	III	出合			○○●	III
	IV	一宇 山城谷			○○●	IV
	V	三名 小歩危 (西宇) 大歩危 (上名) (下名)			○○●	V
		祖谷 木頭			●●○○	
	VI	菅生 北川			○○● ●●○○	VI



46

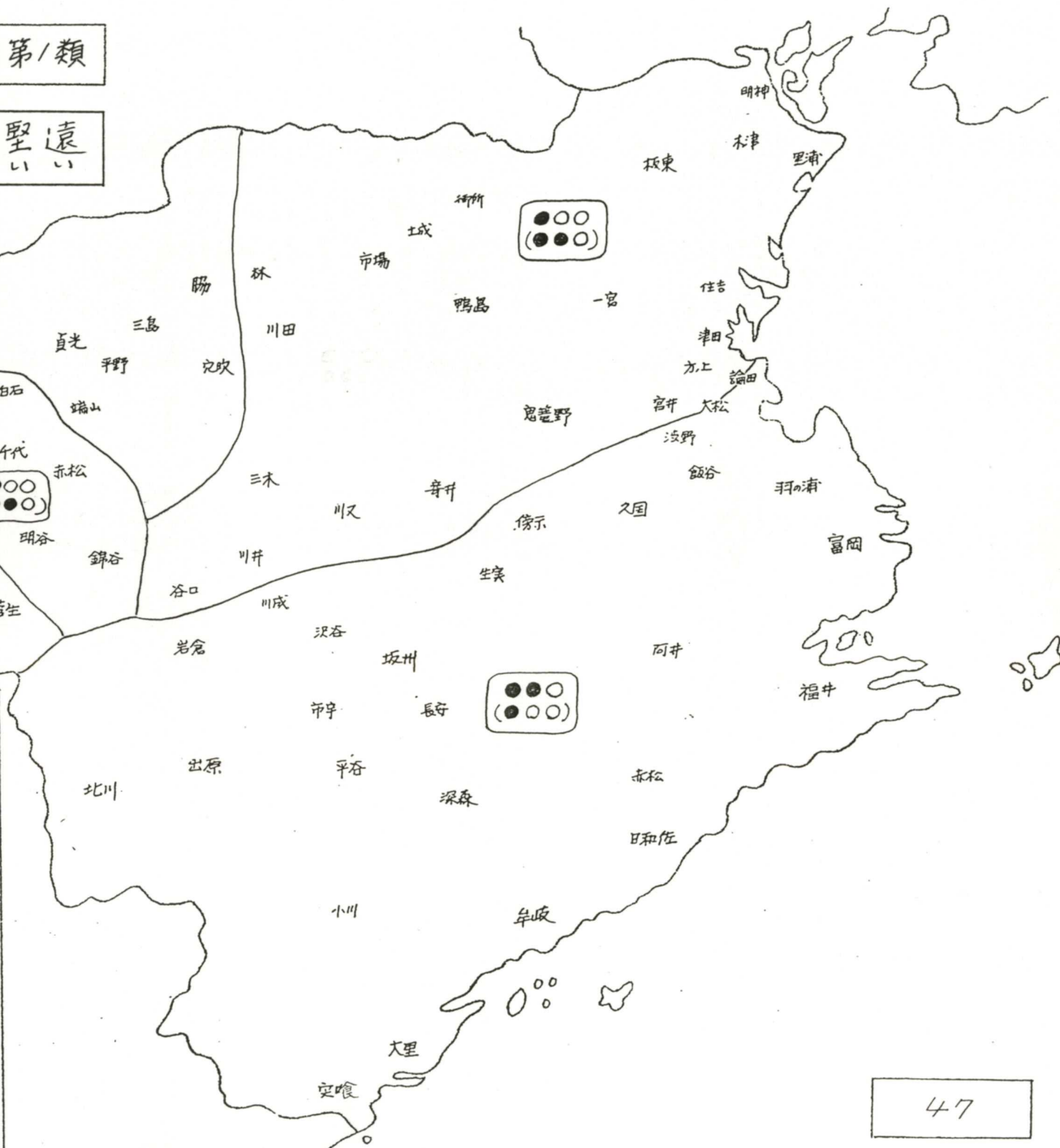
47

三音節形容詞第1類

赤 浅 甘 荒 重 軽 丸 厚 薄 遅 堅 遠
い い い い い い い い い い い い

県西里分は頭高型で安定しているが、
県北里分では、鳴門市、名西山分の
高年層に(●●○)型が残りしていた。
県南地方は(●●○)型が
一般的であるが、小松島、
富田などの都市部から
(●●○)型化する傾向が
あった。
県西山分地方は、主として
(●●○)型ではあるが、
若い世代(すなわち、現
在の中年層)に変化の
兆候が見られた。

		京 都 (甲種77位)	●○○	東 京 (乙種77位)	○○●		
一九五七年 (昭和32)	I	徳島市	●○○			I	一九八九年 (平成1)
	II	池田	●○○			II	
	III	出合	●○○			III	
	IV	一宇 山城谷	●○○○ (○○●●)			IV	
		小歩危 (西宇)	●○○				
	V	三名 大歩危 (上名)	●○○			V	
		祖谷 木頭	●●○○				
VI	菅生 北川	●○○○ ●●○○			VI		



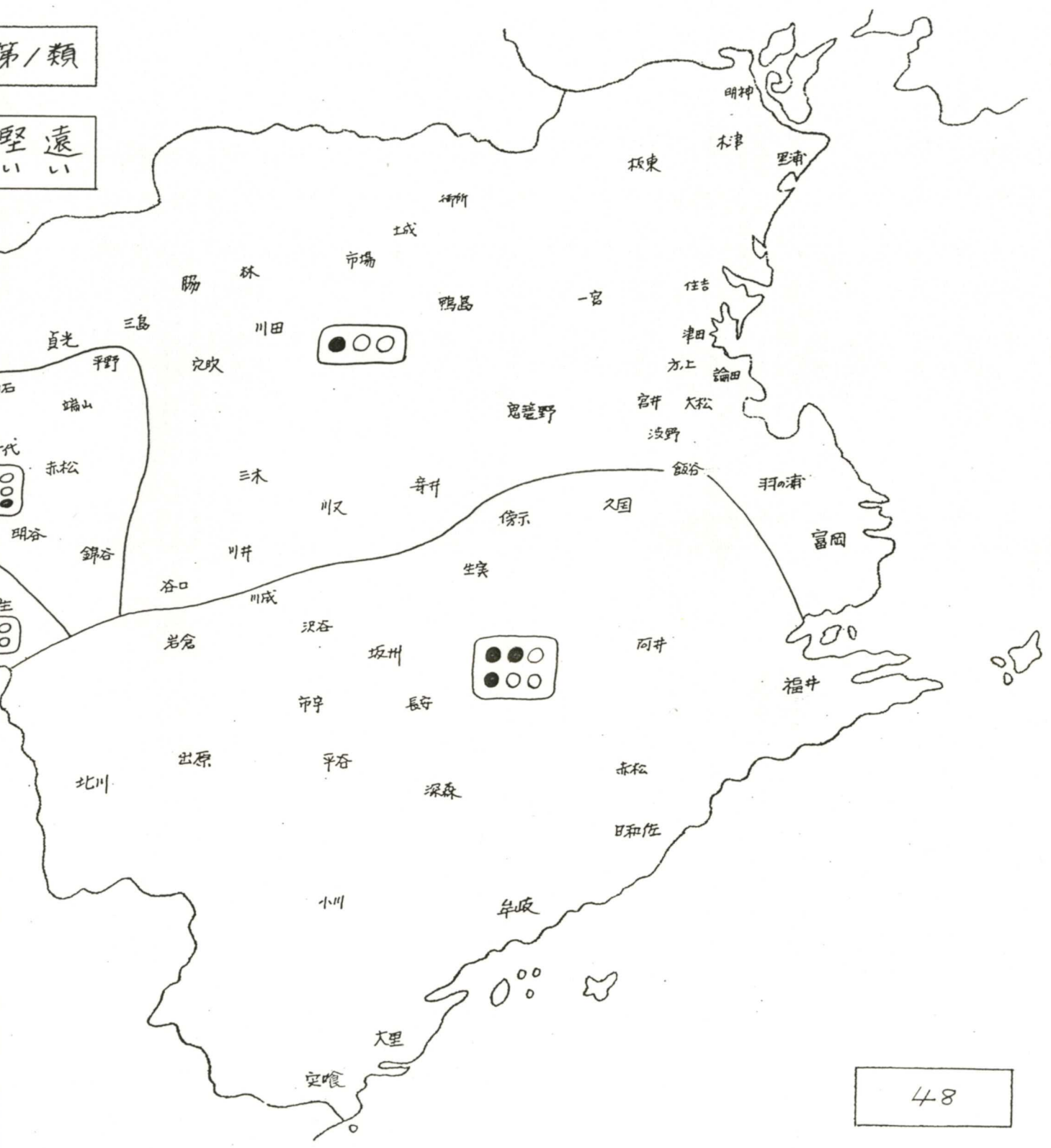
47

48

三音節形容詞第1類

赤浅甘荒重軽丸厚薄渾堅遠
い い い い い い い い い い

		京都 (甲種7地区)	●○○	東京 (乙種7地区)	○○●		
一九五七年 (昭和32)	I	徳島市	●○○		●○○	I	一九八九年 (平成1)
	II	池田	●○○		●○○	II	
	III	出合	●○○		○○● ●●● ●○○	III	
	IV	一早 山城谷	●○○ (○○●●)		○○● ●●● ●○○	IV	
		小歩危 (西宇)	●○○		●○○		
	V	三名 大歩危 (上名)	●○○		○○● ●○○	V	
		祖谷 木頭	●●○		●○○ ●●● ●○○		
	VI	菅生 北川	●○○ ●●○		●●● ●●● ●○○	VI	



48

49

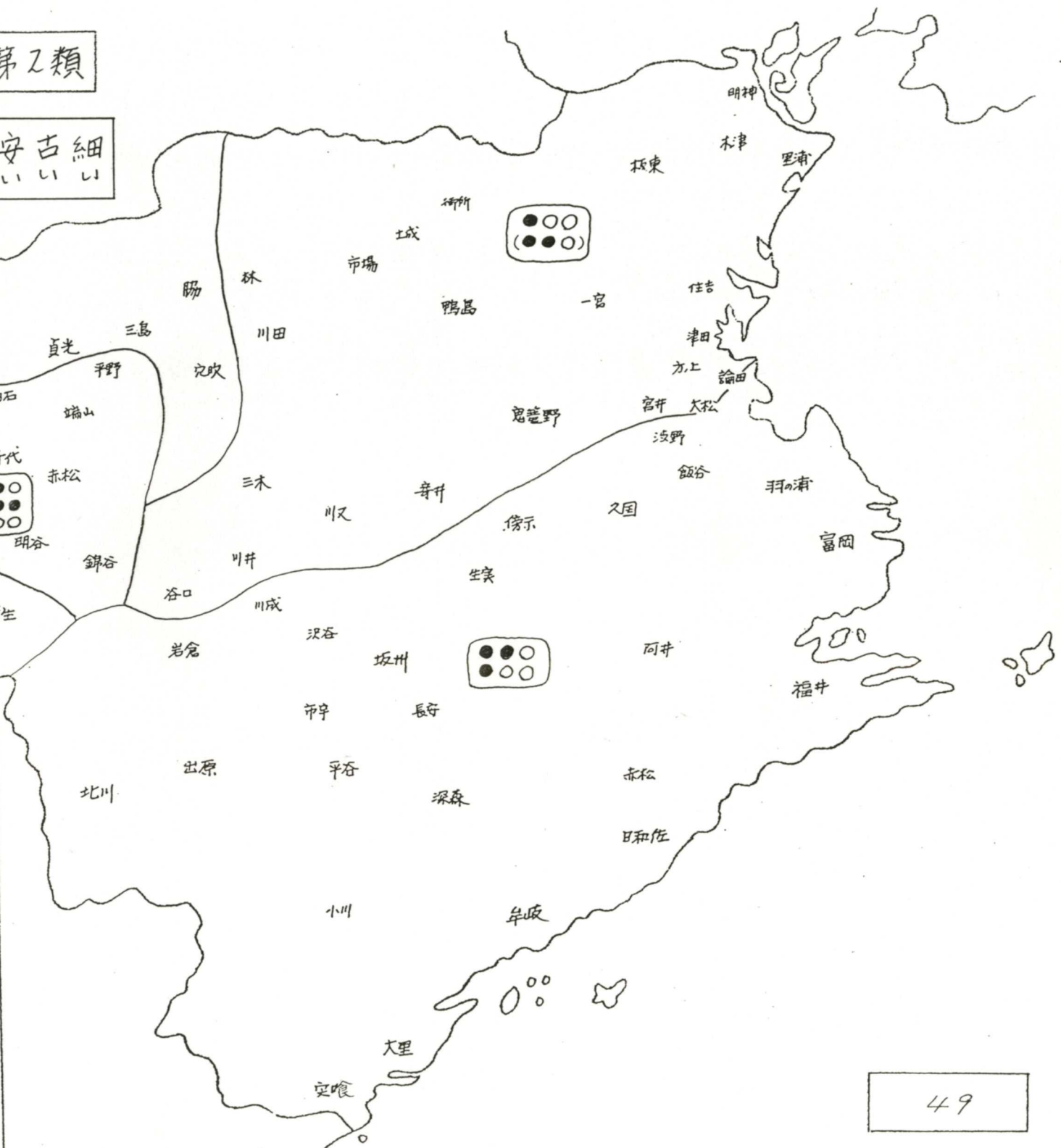
三音節形容詞第2類

青暑清黒寒白狭高近強長早安古細
い い い い い い い い い い い い

県北里分の^{ほいた}下板地方の高年層は
「青い、清い、白い」を(●●○)型
とすることがある。

県東・県南の各地では
「青い、清い」が(●●○)
型となるほか、「黒い、
強い」などもその傾向
がある。地域的には、
海部郡下灘地方に
(●●○)型が多い。

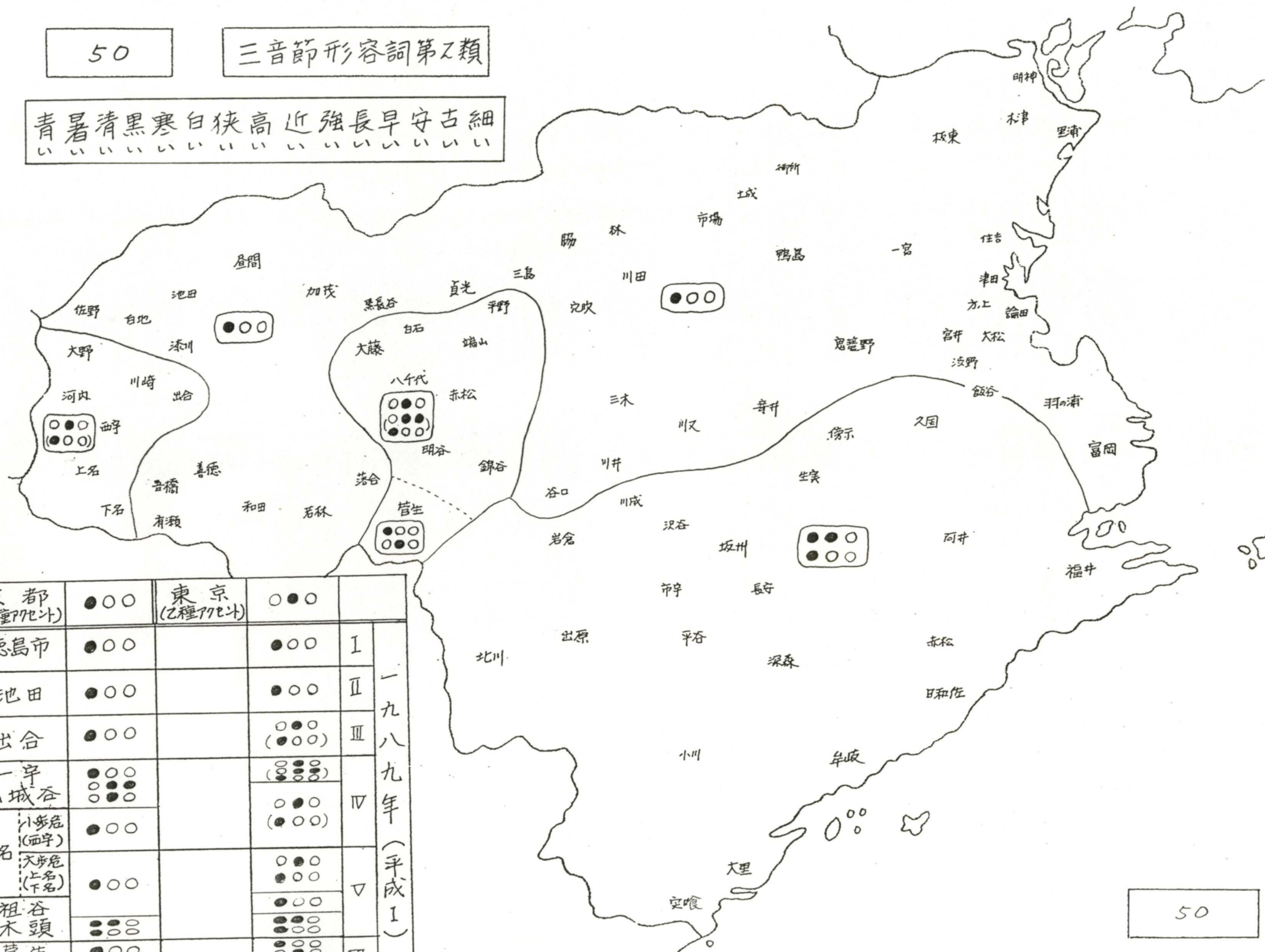
		京 都 (甲種77%)	●○○	東 京 (乙種77%)	○○●		
一九五七年 (昭和32)	I	徳島市	●○○			I	一九八九年 (平成1)
	II	池田	●○○			II	
	III	出合	●○○			III	
	IV	一宇 山城谷	○●○ ●●○ ●○○			IV	
		小歩危 (西宇)	●○○				
	V	三名 大歩危 (上宇)	●○○			V	
		祖谷 木頭	●●○ ●○○				
VI	菅生	●○○			VI		
	北川	●●○ ●○○					



50

三音節形容詞第2類

青暑清黒寒白狭高近強長早守古細
い い い い い い い い い い い い い い い



		京都 (甲種7地区)	東京 (乙種7地区)		
一九五七年 (昭和32)	I	徳島市	●○○	○○●	I
	II	池田	●○○	●○○	II
	III	出合	●○○	○○○ (●○○)	III
	IV	一宇 山城谷	●○○ ○○○	○○○ (●○○)	IV
		小歩危 (西宇)	●○○	○○○ (●○○)	
	V	三名 大歩危 (上名)	●○○	○○○ ●○○	V
		下名	●○○	●○○	
	VI	祖谷 木頭	●○○ ●○○	●○○ ●○○	VI
		菅生 北川	●○○ ●○○	●○○ ●○○	

50

